

香川県埋蔵文化財調査年報

昭和 63 年度

1989.3

香川県埋蔵文化財研究会

例　　言

1. 本書は、昭和63年度の県内における埋蔵文化財保護行政及び発掘調査の概要集である。
2. 発掘調査結果の概要を掲載した遺跡の位置は図（P 68）に示し、埋蔵文化財保護行政、調査の概況については一覧表（P 4～11）に示した。
3. 本文頁は通し番号としたが、挿図・図版番号は遺跡ごとに付した。
4. 遺跡の配列は、県教委主体の調査、市町教委等主体の調査の順とした。後者については原則として東から西の地域への順とした。
5. 香川県教育委員会事務局文化行政課職員が発掘調査指導を行った遺跡は、各市町の了解のもとに収録した。
6. 各遺跡の位置については、国土地理院発行の25,000分の1及び50,000分の1の地形図を使用した。
7. 各遺跡の羅列は執筆者が行い、全体編集を県教育委員会文化行政課が行った。

目 次

1. 昭和63年度埋蔵文化財保護行政の動向	1
2. 昭和63年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況	4
3. 発掘調査結果の梗概	
(1) 国分台遺跡	12
(2) 鶴の部山古墳	16
(3) 鶴部南谷遺跡	18
(4) 高松東バイパス建設	20
予定地内遺跡	
(5) 福家東羽間地区	24
(6) 下屋遺跡	25
(7) 伊喜木遺跡	28
(8) 西又遺跡	30
(9) 備中地遺跡	32
(10) 千町遺跡、了智坊遺跡	34
(11) 須ノ又遺跡、神之植遺跡	36
(12) 国広塚	37
(13) 元結木遺跡	38
(14) 戸形遺跡	40
(15) 城山古墳群	42
(16) 御産盟山古墳	45
(17) 弘福寺領瀧岐園	48
山田郡田岡比定地	
(18) 栗林公園	49
(19) 仏願古墳群	50
(20) 瀧岐國府跡	52
(21) 瀧岐國府跡	53
(22) 折居古墳	54
(23) 稲木遺跡	55
(24) 仲村庵寺	56
(25) 紫雲出山遺跡	57
(26) 小鳩島貝塚	58
(27) 宮山窯跡	59
(28) 炒音寺遺跡	60
4. 香川県埋蔵文化財調査センター発掘調査概況	
(1) 四国横断自動車道建設に伴う高松～普通寺発掘調査概況	61
(2) 国道バイパス建設に伴う発掘調査概況	63

昭和63年度埋蔵文化財保護行政の動向

1.はじめに

本年度は4月10日に瀬戸大橋が開通し、本州と四国が陸続きとなった記念すべき年である。また、道路網の整備、各種レジャー施設等の建設が急ピッチで進められており、県下はあらゆる面で転換の時を向かえようとしている。こうした中で、開発と埋蔵文化財保護との調整は緊急性を増し、様々な成果とともに多くの課題を残した年であったと言える。

2.調査、保護体制の充実

瀬戸大橋架橋に伴い各種道路網の整備等が急がれていますから、埋蔵文化財調査体制の充実が今年度の最大の課題であったと言える。特に、四国横断自動車道（善通寺～高松）、や一般国道11号線高松東バイパス建設に伴う発掘調査は、短期間に広大な面積を調査する必要性から、県教育委員会では文化財専門職員を新たに10名採用するとともに、教員の協力を得て調査体制の充実を図る一方、発掘調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託するなど、迅速化、効率化を図って対応した。

市、町教育委員会では、高松市教育委員会が1名専門職員を採用し、県下の配置状況は3市2町の計7名となった。また、全県的に及ぶ各種開発事業の急増から、その他の市町においても具体的な保護行政を取り組むため、徐々にではあるが専門職員の採用が具体化しつつある。

3.開発事業の動向と埋蔵文化財の保護

過去5か年の開発事業種別の埋蔵文化財発掘調査状況は下表のとおりである。

事業種別	59		60		61		62		63		
	件数	面積(㎡)	件数	面積(㎡)	件数	面積(㎡)	件数	面積(㎡)	件数	面積(㎡)	
公 團	瀬戸大橋	6	3,075	2	29,900	1	38,200	1	19,800	—	—
	四国横断道	17	57,900	14	78,500	6	54,120	1	480	10	89,993
國道バイパス	0	—	0	—	3	976	5	14,260	10	120,114	
県 事 業	県道、農道	3	210	2	550	3	5,150	0	—	6	2,012
	圃場整備	0	—	0	—	1	6	0	—	5	1,129
	その他	1	3,635	1	6,000	4	1,327	1	42	2	605
市 町 等 事 業	市、町道	0	—	2	150	2	1,600	3	3,120	2	240
	圃場整備	4	2,200	6	2,796	7	9,127	3	650	0	—
	その他	1	100	4	1,430	5	3,877	5	1,847	3	911
一般業者等	0	—	4	3,524	4	1,204	7	3,516	10	1,920	
個 人	6	8,943	3	420	3	328	4	3,180	4	123	
合 計	38	76,063	38	123,270	39	115,915	30	46,895	52	217,047	

※件数、面積ともに事前調査、確認調査合計の数字である。

今年度は調査の件数、面積ともに過去最高の数字となっているが、四国横断道、国道バイパス建設に伴う事業量の急増に負うところが大きいと言える。また、一覧表のうち県事業以下の調査についての大きな傾向は、面積において突飛的に急増、激減がみられ、安定性のない点である。この点は、市町教育委員会の調査体制の整備が未熟で、開発サイドに大きく左右される姿を浮きぼりにしており、今後の課題の1つである。

県教育委員会では、一般国道11号高松東バイパス等国道バイパス建設に伴う発掘調査を昨年度開始したが、今年度は同事業が本格化するとともに、新たに四国横断自動車道（普通寺～高松）建設に伴う発掘調査を開始した。調査面積は、前者が約116,000m²、後者が約90,000m²にのぼり、総計では過去県教委実績中最高であった昭和60年度のはば2倍に達している。県道建設に伴う対応は、本調査2、試掘調査4、分布調査3、工事立会5であり、いずれも0であった昨年度と比較すれば、やはり急激な伸びを示している。

今年度より主的な対応を開始したのが、国庫補助を受けて行った県営圃場整備事業に伴う遺跡詳細分布調査である。今年度は5事業計82.3haについて実施し、新たに発見あるいは内容を把握した遺跡6、総面積約56,000m²という成果を挙げた。これらはほとんどの部分が設計変更により現状保存されることになり、保護行政の1つの進歩と言える。

こうした公共事業とは別に、民間業者による各種レジャー施設等の大規模開発事業が急増したのも今年度の特徴の1つである。本県においては、おおむね5ha以上の大規模開発に際しては、「大規模土地開発事業指導処理要綱」が設けられ、事前に諸法令による行政指導が行われている。この行政指導の中で県教育委員会は、工事着手後遺跡を不時発見した場合の混乱を可能な限り回避するため、事前に分布調査等を実施するよう当該市町教育委員会に要請している。今年度分布調査等を実施した事業は15事業で、総事業面積は約1,110haにのぼっており、昨年度が3事業計220haであったとの比較し、いずれも5倍と急激な伸びを示している。

4. 行政主導型の保護

今年度の教育委員会の史跡整備事業は、3遺跡について継続実施あるいは着手している。特別史跡瀬戸内国分寺跡の整備は、国分寺町教育委員会が昭和58年度より実施しているが、今年度は寺域の北及び西部の植栽工事を行った。史跡王墓山古墳の整備は、普通寺市教育委員会が昭和61年度より実施しており、今年度は横穴式石室復元のための実施設計及びボーリング調査等を実施した。また、今年度より県指定史跡紫雲出山遺跡の整備を詫間町教育委員会が実施することになり、今年度は整備地区的発掘調査を行っている。

史跡指定については、今年度新たに坂出市の沙弥ナカシダ浜遺跡を県史跡に指定した。縄文時代から中世に至る複合遺跡であり、特に焼塙炉を検出した製塙遺跡としての重要性に基づくもので、今後は坂出市教育委員会が管理団体として遺跡の保存、管理に当たることになった。

教育委員会による遺跡内容把握のための学術調査としては、県教育委員会による鶴の部山古墳

測量調査、高松市教育委員会による弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地発掘調査並びに豊中町教育委員会による宮山塗跡発掘調査がある。

普及活動の動きとしては、昨年度11月に開所した香川県埋蔵文化財センター展示室の一般公開が挙げられる。4月公開以来既に来館者数は8,000人（2月末現在）を数えており、埋蔵文化財に関する一般への啓蒙、普及に寄与するところは大きい。

5. 主な発掘調査成果

旧石器時代の調査成果としては、丸亀市の三条黒島遺跡出土の旧石器接合資料が挙げられる。「瀬戸内技法」と呼ばれる石器製作技法の内容を具体的に示すとともに、丸亀平野の形成を考える上でも貴重な発見であった。

縄文時代では、高松市の林・坊城遺跡、仁尾町小島貝塚が挙げられる。林・坊城遺跡では晩期の土器とともに駿くわ、広くわ半製品等の木製品が出土した。小島貝塚では、貝塚周辺調査により早期の土器片等を検出し、遺跡の消長を知る資料を得ている。

弥生時代では弘福寺領調査で弥生時代水田跡を検出したほか、普通寺市仲村庵寺、詫問町紫雲出山遺跡等の集落遺跡の調査を行っている。特に、紫雲出山遺跡では初めて竪穴住居跡を検出しておらず、同遺跡の生活領域を解明する上で貴重な発見であった。また、林・坊城遺跡では、後期のものと考えられる円形周溝状遺構が県下で初めて確認されている。

古墳の調査としては、飯山町城山古墳群がある。4基からなる古式群集墳のほか、南北方向主軸の竪穴式石室をもつ5号墳を確認している。古墳時代の集落遺跡では、仲村庵寺の調査で前期～後期の竪穴住居跡20棟等を検出している。また、前田東・中村遺跡では旧河川内より弥生時代後期～古墳時代前期の土器とともに、多量の木製品が出土し注目を集めた。

奈良時代以降では、多数の掘立柱建物跡を検出した郡家原遺跡、郡家一里屋遺跡のほか、讃岐国分寺跡、妙音寺、仲村庵寺など古代寺院の調査が行われた。また、讃岐国府跡、弘福寺領など当時の政治、社会体制を知る上で貴重な遺跡の調査が行われている。

6. おわりに

今年度は開発に伴い急増する事前調査に追われる一方で、文化財保護部局が主体的に保護行政に取り組んだ年であったと言えよう。しかしながら、行政内部の連絡あるいは関係者への周知活動の不徹底から、貴重な遺構が損壊を受けた事例が2例あるなど、全県的な保護体制の確立はその緒に就いたばかりの段階にある。また、専門職員配置の有無による保護行政状況の市町間隔差は明らかであり、市町教育委員会における調査体制の確立も急務である。

史跡指定を受けた遺跡や事前協議により現状保存された遺跡については、一部で整備事業が実施されているものの、多くは放置されたままの状態にある。整備された遺跡が一般に対する保護意識の普及に果たす役割は大きく、今後は遺跡の保存ばかりでなく有効な活用方法についても検討していくなければならない段階にきていると言えよう。

昭和63年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	遺跡				調査	
	名 称	所 在 地	種類	時 代	原 因	原 因 者
1	上天神遺跡	高松市上天神町、三条町	集落跡	弥生	一般国道11号高松東バイパス建設	建設省
2	林坊城遺跡	〃 林町	包蔵地	縄文 ～弥生	〃	〃
3	六条上所遺跡	〃 六条町	〃	古墳 ・中世	〃	〃
4	東山崎水田遺跡	〃 東山崎町	集落跡	中世	〃	〃
5	前田東中村遺跡	〃 前田東町	包蔵地	弥生 ～古墳	〃	〃
6	京免遺跡	普通寺市	〃	弥生 ・近世	一般国道319号普通寺バイパス建設	〃
7	香川郡条里遺跡	高松市田村町	条里跡	弥生 ～近世	一般国道32号円座バイパス建設	〃
8	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	包蔵地	弥生 ～中世	四国横断自動車道(高松～普通寺)建設	道路公團
9	三条黒島遺跡	〃 〃	生産遺跡	旧石器 ・弥生	〃	〃
10	郡家原遺跡	〃 郡家町	集落跡	弥生 ・奈良	〃	〃
11	郡家一里屋遺跡	〃 〃	〃	奈良 ・平安	〃	〃
12	郡家大林上遺跡	〃 〃	〃	奈良 ・近世	〃	〃
13	郡家田代遺跡	〃 〃	〃	旧石器 ～奈良	〃	〃
14	川西北原遺跡	〃 川西町	包蔵地	中・近世	〃	〃
15	川西北七条Ⅰ遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	〃
16	川西北七条Ⅱ遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	〃
17	飯野東二瓦砾遺跡	〃 飯野町	集落跡	平安 ～中世	〃	〃
18	東山崎水田遺跡 前田東中村遺跡	高松市東山崎町、 前田東町	〃	弥生 ～中世	一般国道11号高松東バイパス建設等	建設省
19	鴨部南谷遺跡	大川郡志度町大字 鴨部	〃	弥生 ～古墳	県営開発整備事業(鴨部)	県
20	千町遺跡	大川郡大川町富田中	〃	弥生 ～近世	〃 (大川)	〃
21	須ノ又遺跡	三豊郡高瀬町下勝間	〃	古墳	〃 (高瀬)	〃
22	国広塚	三豊郡三野町大字 国広	その他の 墓	中・近世	〃 (三野西部)	〃

調査						
対象	調査主体	調査面積 (m ²)	調査期間	担当者	費用負担	文化財保護法 57条の3 (98条の2)
事前調査	県教委	12,600	63. 6. 14 ~11. 30	鶴香川県埋蔵 文化調査センター	建設省	工事実施予定
"	"	29,200	63. 4. 14 ~11. 30	"	"	"
"	"	30,310	63. 8. 6 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	25,400	63. 10. 1 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	16,170	63. 8. 6 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	2,200	63. 6. 27 ~8. 31	"	"	"
"	"	150	63. 7. 5 ~7. 11	"	"	"
"	"	12,041	63. 4. 18 ~元. 3.31	"	道路公園	"
"	"	7,677	63. 6. 14 ~11. 30	"	"	"
"	"	17,099	63. 4. 18 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	14,067	63. 4. 18 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	11,175	63. 6. 14 ~元. 3.22	"	"	"
"	"	12,741	63. 6. 14 ~元. 3.17	"	"	"
"	"	3,033	63. 12. 12 ~元. 3.25	"	"	"
"	"	4,034	63. 12. 12 ~元. 3.25	"	"	"
"	"	4,760	元. 2. 1 ~元. 3.31	"	"	"
"	"	3,366	63. 12. 12 ~元. 3.25	"	"	"
確認調査	"	3,366	63. 6. 20 ~7. 20	県教委職員	国・県	98条の2 本調査実施
"	"	80	63. 7. 20	"	"	包蔵地確認さ れず
"	"	434	63. 7. 28 ~8. 1	"	"	現状保存
"	"	200	63. 8. 8 ~8. 9	"	"	"
"	"	15	63. 8. 5	"	"	"

昭和63年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	遺跡				調査	
	名称	所在地	種類	時代	原因	原因者
23	下屋遺跡	大川郡長尾町昭和	集落跡	弥生 ～古墳	県道高松長尾大内線建設	県
24	西又遺跡	坂出市川津町	"	弥生	県道富庶宇多津線拡幅	"
25	国分台遺跡	綾歌郡国分寺町国分	散布地	旧石器	植栽工事に伴う採土	高松防衛施設事務所
26	福家東羽間地区	綾歌郡国分寺町福家	包蔵地	不明	一般国道32号線綾南バイパス建設	建設省
27	伊喜末遺跡	小豆郡土庄町伊喜末	包蔵地	縄文 ～古墳	県道扇形崎小江渓崎線拡幅	県
28	備中地遺跡	仲多度郡牟田町鹿田	集落跡	縄文 ～弥生	県道府中琴南線拡幅	"
29	丸結木道路	坂出市川津町	"	不明	中小河川大東川改修	"
30	太田下須川遺跡	高松市太田下町	"	弥生	一般国道11号高松東バイパス建設	建設省
31	飯野東一瓦礫遺跡	丸龜市飯野町	"	平安 ～中世	県道飯野宇多津線建設	県
32	鶴の山古墳	大川郡津田町鶴羽	古墳	古墳	遺跡内容把握	県教委
33	城山古墳群	綾歌郡飯山町東坂元	"	"	町総合運動公園建設	飯山町
34	戸形遺跡	小豆郡土庄町人字小瀬	散布地	旧石器	土砂崩防止工事	町教委
35	紫雲出山遺跡	三豊郡蛇間町大字大浜	集落跡	弥生	遺跡整備	蛇間町
36	込田下所地区他	坂出市府中町字込田下所他	包蔵地	不明	ゴルフ場建設	業者
37	小萬鳥貝塚	三豊郡仁尾町北丁	貝塚	縄文	学術調査	古代学協会四国支部
38	稻木遺跡	普通寺市稻木町	集落跡	弥生 ～古墳	県道西白方善通寺線建設	県
39	宮山廬跡	三豊郡豊中町大字比地大	廬跡	古墳	遺跡詳細分布調査	町
40	丸山城跡	坂出市府中町字丸山	城跡	中・近世	ゴルフ場建設	業者
41	仏頭古墳群	坂出市加茂町大字鶯の谷	古墳	古墳	土砂採取	"
42	紫雲出山遺跡	三豊郡蛇間町大字大浜	集落跡	弥生	四国のみち建設	県
43	白板古墳群	三豊郡高瀬町人字羽方	古墳	古墳	ゴルフ場建設	業者
44	御産瀧山古墳	仲多度郡多度津町大字西白方	"	"	貯水槽設置	海岸寺

調査							
対象	調査主体	調査面積 (㎡)	調査期間	担当者	費用負担	文化財保護法	調査後の措置等
確認調査	県教委	165	63. 9. 21 10. 17~18	県教委職員	県教委	57条の6 (98条の2)	来年度事前調査
"	"	65	63. 9. 26 10. 22~24	"	"	98条の2	"
"	"	10	63. 9. 30	"	"	"	現状保存
"	"	18	63. 10. 13	"	"	"	工事実施
"	"	20	63. 11. 28	"	"	"	"
"	"	36	63. 11. 25	"	"	"	"
"	"	14	63. 11. 24	"	"	"	来年度事前調査
"	"	700	元. 1. 19 ~1. 31	"	"	"	"
事前調査	神奈川県教育文化財調査センター	926	元. 1. 9 ~3. 31	"	県	53条の3 (57条の2)	工事実施予定
測量調査	県教委	5,000	元. 2. 2 ~2. 13	"	県教委	98条の2	保存等について 町教委指導
確認調査	町教委	400	63. 5. 16 ~6. 22	町教委職員・ 県教委指導	町	"	保存等について 協議中
事前調査	町教委	11	63. 6. 10	"	町教委	57条の3 (98条の2)	包蔵地確認されず
確認調査	"	500	63. 7. 18 ~8. 2	香川大学	"	98条の2	整備事業実施
"	市教委	20	63. 6. 28	市教委職員	業者	"	包蔵地確認されず
"	古代学協会 四国支部	125	63. 8. 4 ~8. 13	香川大学	古代学協会 四国支部	57条	研究活用
事前調査	調査団	800	63. 8. 1 ~10. 27	市教委職員	県	57条の3 (57条)	工事実施
確認調査	町教委	295	63. 7. 27 ~9. 6	町教委職員	団・県・町	98条の2	資料整備
"	市教委	20	63. 7	市教委職員	業者	"	事前調査実施
確認調査	"	200	63. 7. 17 ~10. 8	"	"	57条の2 (98条の2)	協議中
"	調査団	108	63. 8. 20 ~8. 29	香川大学	県	57条の3 (57条)	包蔵地確認されず
"	高瀬町教委	507	63. 9. 19 ~9. 30	豊中町教委職員		98条の2	"
事前調査	町教委	13	63. 9. 14	県教委指導	町教委	57条の2 (98条の2)	歴史注意

昭和63年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	遺跡				調査	
	名 称	所 在 地	種類	時 代	原 因	原 因 者
45	折居古墳	坂出市川津町字折居	古 墓	古墳	進入路建設	市
46	讚岐国府跡	坂出市府中町	官 衙 跡	奈良	個人住宅建設	個 人
47	大宮古墳	大川郡長尾町昭和	古 墓	古墳	遺跡内容把握	町 教 委
48	中村廃寺	普通寺市仙遊町	社 寺 跡 集落跡	弥生 ~奈良	"	市 教 委
49	栗林公園	高松市栗林町	庭園跡	近世	庭園復元	県
50	西宝寺南3号墳	高松市西宝町	古 墓	古墳	墓地造成	西 宝 寺
51	弘福寺領讃岐国山田 郡田園北部地区推進地	高松市林町	条里跡	奈良	学術研究	市 教 委
52	" 南部地区推定地	高松市多肥上町, 上林町	"	"	"	"
53	西岡古墳	高松市西植田町	古 墓	古墳	レジャー施設設置	業 者
54	讃岐国府跡	坂出市府中町	官 衙 跡	奈良	個人住宅建設	個 人
55	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺町国分	社 寺 跡	奈良	賃貸住宅建設	個 人
56	"	"	"	"	個人駐車場造成	"
57	"	"	"	"	遺跡内容把握	町 教 委
58	鴨部南谷遺跡	大川郡志度町大字 鴨部	集落跡	弥生 ~古墳	黒岩園場整備事業(鴨部)	県
59	妙音寺遺跡	三豊郡豊中町大字 上高野	社 寺 跡	奈良	妙音寺客殿建設	妙 音 寺
60	川西北七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	集落跡	中・近世	市道川西飯野線建設	市
61	丸山城跡	坂出市府中町字丸山	城 館 跡	"	ゴルフ場建設	業 者
62	本村古墳群	坂出市府中町字西山	古 墓	古墳	"	"
63	天王城跡	三豊郡財田町財田上	城 鎧 跡	中世	総合運動公園建設	町
64	柳谷遺跡	坂出市大屋富町	散 布 地	弥生	遺物出土	市 教 委
65	立石古墳	木田郡三木町大字 井上	古 墓	古墳	レジャー施設	業 者

調査						
対 起	調査主体	調査面積 (㎡)	調査期間	担 当 者	費用負担	文化財保護法 調査後の措置等
事前調査	市 教 委	100	63. 8. 8 ~11. 20	市教委職員	市	57条の 5 (98条の 2)
"	"	45	63. 11. 10 ~10. 20	市教委員職員	市 教 委	57条の 2 (98条の 2) 工事実施
確認調査	町 教 委	15	63. 10. 18	町教委職員 県教委指導	町 教 委	98条の 2 資料整備
"	市 教 委	1,400	63. 11. 7 ~元. 2.23	市教育職員	市 教 委	" "
"	県	496.5	63. 12. 20 ~元. 3.31	香川大学	県	80 条 協議中
"	市 教 委	20	63. 10. 31 ~11. 4	市教委職員	市 教 委	98条の 2 包蔵他確認さ れず
"	"	365	63. 11. 7 ~元. 2.24	"	国・県・市	研究活用
"	"		"	"	"	"
"	"		63. 11. 9 ~12. 8	"	業 者	" 包蔵他確認さ れず
事前調査	"	25	63. 11. 8 ~11. 10	"	市 教 委	57条の 2 (98条の 2) 工事実施
"	町 教 委	39	63. 11. 20 ~12. 1	町教委職員	町 教 委	80 条 未 定
"	"	13.5	"	"	"	"
確認調査	"	106	63. 12. 1 ~元. 2.5	"	"	研究活用
事前調査	町 教 委	400	63. 12. 7 ~12. 26	町教委職員	国・県	57条の 6 (98条の 2) 工事実施
確認調査	"	90	63. 12. 12 ~12. 27	町教委職員	町 教 委	98条の 2 "
事前調査	市 教 委	140	元. 2. 20 ~2. 28	市教委職員 県教委指導	市 教 委	57条の 3 (98条の 2) "
"	"	400	元. 3. 7 ~	市教委職員	業 者	57条の 2 (98条の 2) 工事実施予定
"	"	500	元. 3. 7 ~	"	" 57条の 3 (98条の 2) "	"
						57条の 3 戒重注意
分布調査	県 教 委		63. 6. 14	県教委職員	県 教 委	57条の 6 保存等につい て指導
"	町 教 委		63. 11. 21	町教委職員 県教委指導	町 教 委	" "

昭和63年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況〔現地踏査、立会調査の概況〕

番号	位 置	原 因	事業主体	事業面積	調査内容	調査の原因
1	三豊郡豊中町	県営圃場整備 (轟中)	県	15.9ha	分布調査	大規模事業
2	三豊郡三野町	" (三野西部)	"	20.2ha	"	"
3	綾歌郡綾上町東分	農道整備 (長柄2期地区)	"	7,100m ²	"	宮地包含地が所在
4	三豊郡豊中町～財田町	広域営農用地農道 整備 (西瀬地区)	"	99,500m ²	"	大規模事業 高野城跡が隣接
5	木田郡三木町	ため池整備 (山大寺池)	"	堤体 $\phi=340\text{m}$	"	山人寺池北丘上古 墳が隣接
6	観音寺市村黒町、 吉岡町	県道黒瀬本大線拡幅	"	500m ²	"	横田遺跡等が隣接
7	観音寺市木之郷町	" 善通寺大野原線 建設	"	1,000m ²	立会調査	尼神山古墳群が 隣接
8	普通寺市上吉田町	"	"	3,000m ²	"	京免遺跡が隣接
9	高松市高松町	" 高松志度線拡幅	"	1,000m ²	分布調査	人空遺跡が隣接
10	小豆郡土庄町小部	" 土庄内海線建設	"	8,000m ²	立会調査	小部浜遺跡が隣接
11	観音寺市新田町	一般国道377号線 建設	"	5,000m ²	"	堂ノ岡遺跡が隣接
12	三豊郡高瀬町二の宮	県道財田上高瀬線 拡幅	"	1,800m ²	"	二の宮遺跡が隣接
13	高松市中間町	アクセス道路建設	"	36,000m ²	分布調査	大規模事業
14	高松市東山崎町 木戸郡三木町池戸	新川激甚災害対策 特別緊急事業	"	延長 9 km	"	" , 久米山 古墳群等が隣接
15	綾歌郡綾南町陶	I瓶山開発	"	25ha	"	大規模事業 すべと塚跡等が所在
16	普通寺市早北町ほか 3地区	広域調整池建設	水道局建 設管理課	約 6 ha	"	大規模事業
17	綾歌郡綾上町	綾上町東北山地区廃 棄物埋立処分事業	県 墓 墓 保全公社	10.4ha	"	"
18	三豊郡宍間町大浜	配水管埋設	詫 間 町	$\phi=547\text{m}$	立会調査	紫雲山山遺跡が 所在
19	仲多度郡仲南町、満濃 町、綾歌郡綾歌町	一般国道32号線 満濃バイパス建設	建設 省	112,500 m ²	分布調査	大規模事業

調査主体	調査期間	担当	調査結果の概要
県教委	63. 7. 13	県教委職員	遺物散布なし。一部の地山露出部分でも遺構、遺物は確認されず。
"	63. 7. 12	"	旧海岸線と考えられる段丘下の平坦地域。遺跡所在の可能性はなし。
"	63. 7. 1	"	台地状地形縁辺部の平坦地形。散物散布なし。
"	63. 7. 13	"	丘陵、山間部。遺物散布なし。
"	63. 11. 21	"	池内部の堤体の改修。古墳に影響なし。
"	63. 8. 19	"	遺跡は微高地上に所在。当該地はその周辺の低地であり、遺跡所在の可能性なし。
"	63. 8. 19	"	耕作土下に厚い砂層堆積。遺跡所在の可能性なし。
"	63. 6. 27	"	耕作土、床土直下が地山。遺構、遺物確認できず。
"	63. 11. 21	"	遺構・遺物確認されず。
"	63. 11. 8	"	谷部、遺構・遺物確認されず。
"	63. 8. 19	"	遺構、遺物確認されず。
"	63. 7. 29	"	"
"	63. 10. 8	"	段丘、河道からなる。段丘上に遺跡所在の可能性あり。
"	63. 8. 31 ～9. 1	"	現提防部分、水田と一部丘陵裾部、古墳に影響なし。 遺構・遺物確認されず。
"	元. 3. 8	"	8基の墓跡の位置、現状等確認。来年度範囲確認調査後設計協議予定
"	63. 10. 25 ～10. 26	"	善通寺市与北地区、観音寺市木ノ郷地区は周知の古墳が所在するが、現状保存の予定。その他の地区は遺跡所在の可能性なし。
"	63. 6. 30	"	細長い谷筋。遺跡所在の可能性なし。
町教委	元. 2. 1	町教委職員 県教委 "	表土下約30cmで遺物包含層が所在。以下に掘削が及ばないよう指導。
県教委	63. 10. 26	県教委職員	仲南町内に周知の古墳一基所在。土器川と金倉川に挟まれた平野中央の鰐高地上に遺跡所在の可能性あり。

国分台遺跡

1. 所在地 坂出市、国分寺町国分
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年9月30日
4. 調査面積 11m²
5. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和
6. 調査に至る経過

国分台遺跡は約90haという広大な範囲に旧石器が散布する遺跡として有名である。

7月19日に高松防衛施設事務所より国分台遺跡内にある自衛隊演習場での植栽工事計画についての連絡があり、これを受けて7月26日に県教委が現地視察を行ったところ、工事計画地域の1haのほぼ全域が石器包蔵地と思われる状況であった。当該工事は植栽のための掘削部分だけで約1,000m²あり、昭和34年に行った36m²の調査で数万点の石器・剝片が出土していることから考えると相当数の石器が出土することが予想されたため、協議により盛土工法による遺跡保護を実施することで合意した。その後工事実施主体となる大阪防衛施設局から盛土に必要な土砂を演習場内の当該地（上図）で採取したい旨の連絡があった。今回の調査は植栽工事に伴う土砂採取地域の石器包蔵状況を確認する目的で実施したものである。

7. 調査結果の概要

(1) 調査地域の現況

調査対象地は赤峰台頂部の北北西約200mの地点に位置する。東側に平坦地があり、そこから西へ伸びる舌状の尾根の傾斜地最上位にあたる。

西側は道路敷設の際にすでに削平されて崖状を呈する（右図）。この崖面観察により灰紫色シルトの硬くしまった岩盤が露出し、その上部に赤褐色粘質土、表土層が堆積していることが認められた。

調査対象地の北側は道路に沿って同じ尾根の斜面が続くが道路わきの崖面



調査区位置図



調査対象地概念図

で見るかぎり岩盤上部の堆積層は北になるほど薄くなり石器の包含は認められない。

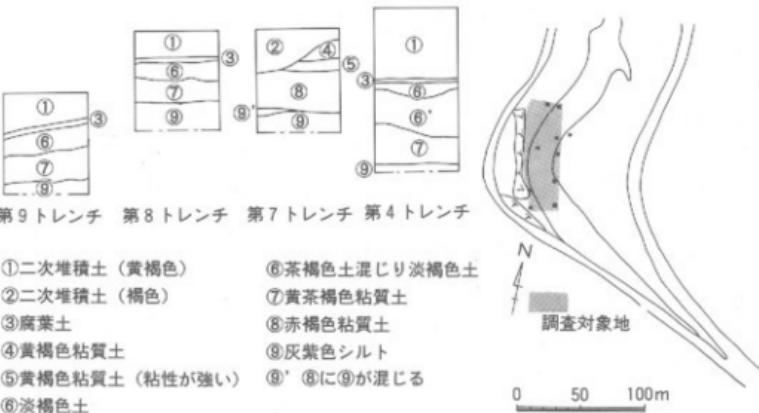
東側の平坦地は上部が削平され、全面に赤褐色土が露出している。また、調査地内にも仮設道のような平坦地がつくられ、その際に削られた土が周囲に盛られている。この盛られた土が仮設道に沿って西側の低い部分に流れた跡が明瞭で、表面にはサヌカイト片が散乱している。

(2) 土層堆積

10か所のトレンチを設定し発掘を始めたが、30cm程下部に旧表土層があることが判明し4か所（第4，7，8，9トレンチ）にしぼって掘り下げを行った。

第4，8，9トレンチは基本的に同じ堆積を示す。灰紫色シルトの上に黄茶褐色粘質土、その上に淡褐色があり旧表土層となる。旧表土は腐葉土層であり新しい時機に埋まつたものであることが推察できる。旧表土の上にはサヌカイト片を多量に含む黄褐色の二次堆積土がある調査対象地の表面にはほぼ全域にこの二次堆積土が見られる。また、旧地表面は調査対象地中央部をピーグとして南北に下がる傾斜地であったことが分かる。

第7トレンチでは、他のトレンチで見られる①・③・⑥・⑦層が見られず、岩盤の上に赤褐色粘質土、黄褐色粘質土が堆積している。黄褐色粘質土は粘性の違いにより二層に分層でき、壁面にサヌカイト片が見られる。また、黄褐色土を削って溝状のものがあり（②層）、しまりの悪い褐色土が埋まっている。



土層断面図（すべて東壁）

トレンチ配置図

(3) 遺物出土状況

10か所のトレンチから出土した遺物の総数は369点である。その内二次堆積土からの出土は295点で全体の約80%にあたる。二次堆積土にはスクレイバー、くさび形石器など合計19点の石器のほか、剝片、石核など良好な資料が比較的豊富に含まれている。また、旧石器だけでなく縄文時代以降のものと思われるものも混在している。

トレンチ別出土遺物集計表							
トレンチ番号	石器	剝片	石核	分離	原石	合計	備考
1	8	11	8	3	16	46	上層のみ
2	1	4	0	0	0	5	上層のみ
3	3	8	1	0	0	12	上層のみ
4	0	6	1	5	27	39	掘下げ
5	1	4	1	2	10	18	上層のみ
6	1	7	0	3	5	16	上層のみ
7	1	8	1	2	8	20	掘下げ
8	1	32	0	8	39	80	掘下げ
9	6	25	3	1	58	93	掘下げ
10	1	5	0	0	34	40	上層のみ
合計	23	110	15	24	197	369	

旧表土以下の層では腐葉土直下の層(⑥層)からスクレイバー1点、二次加工のある剝片3点の合計4点の石器が出土しているが、⑦・⑧からは石器は出土していない。また、⑥層には縄文時代以降の剝片が1点出土している。

(4) 遺物

出土した石器類は172点(369点から原石197点を除く)であるが、土層の項で述べたように二次堆積土に含まれていたのが136点あるため、本来この地域に包含されていたのは36点である。二次堆積土出土の石器(剝片、石核、分離)を除く)は19点あり、この内訳はくさび形石器2点、スクレイバー1点、剝片に加工した石器が16点である。また、他に異状剝片石核(図1)も出土しており、調査区付近でも「国府型」ナイフ形石器が製作されていたことを示している。

⑥層以下から出土した石器類は36点で、遺物量の多い国分台遺跡の中では非常に少ない出土量と言える。道具類が少なく、石器製作の際に出る剝片が多いのが特徴である。

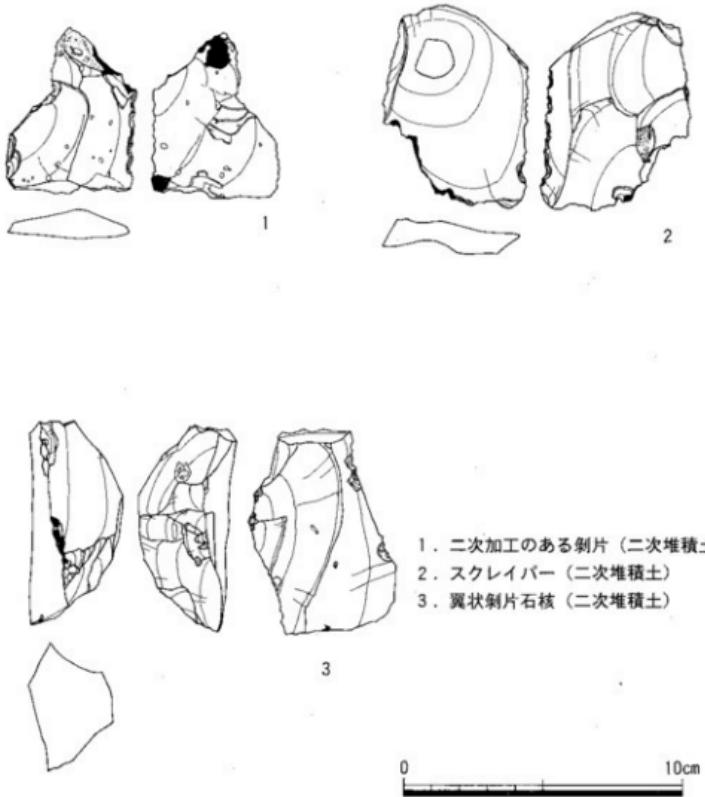
8. まとめ

調査対象地の表面に二次堆積土層がありほぼ全域に広がっていること、この二次堆積土層内に多数の良好な石器、剝片等が包含されていることから、この地点では上層と下層の2箇面から検討する必要がある。

まず、上層は人為的に移動された上で層位的意味はないが、異状剝片石核などが出土したことから、この層が本来堆積していた場所でナイフ形石器が製作されていたことを示す。どこからきたかは今後追究していかなければならないが、周辺の工事から見て、調査対象地東側の尾根頂部

平坦地が遺跡の中心部であったことが推定できる。

次に、下層は上層に比べて遺物の包含量は少なく、石器、剥片類も少ない。このような状況は遺跡の中心から離れた地点でよく見られるものである。今回の試掘調査結果及び周辺の表面観察結果から、赤峰台から北へ派生する尾根の西側斜面には遺物が少ないと見える。これは、尾根頂部に遺跡の中心があり遺物も多いという今までの調査結果を追認したことになる。(安藤)



出土遺物実測図

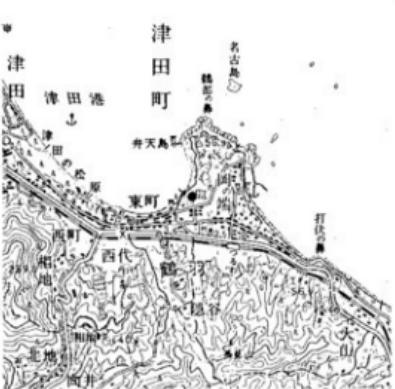
鶴の部山古墳

- 所在地 大川郡津田町鶴羽鶴部
 - 調査主体 香川県教育委員会
 - 調査期間 平成元年2月2日～2月13日
 - 調査面積 5,000m²
 - 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
 - 調査の原因 重要遺跡確認調査
 - 調査結果の概要

鶴の部山古墳は、香川県東端に位置する積石塚前方後円墳であり、また花崗岩バイラン土壇上に築造された積石塚であること等から古くより注目されていた古墳である。しかしながら、古墳の規模・形態等に関する学術資料は皆無で

古墳の規模・形態等に関する学術資料は皆無で

第1図 遺跡の位置

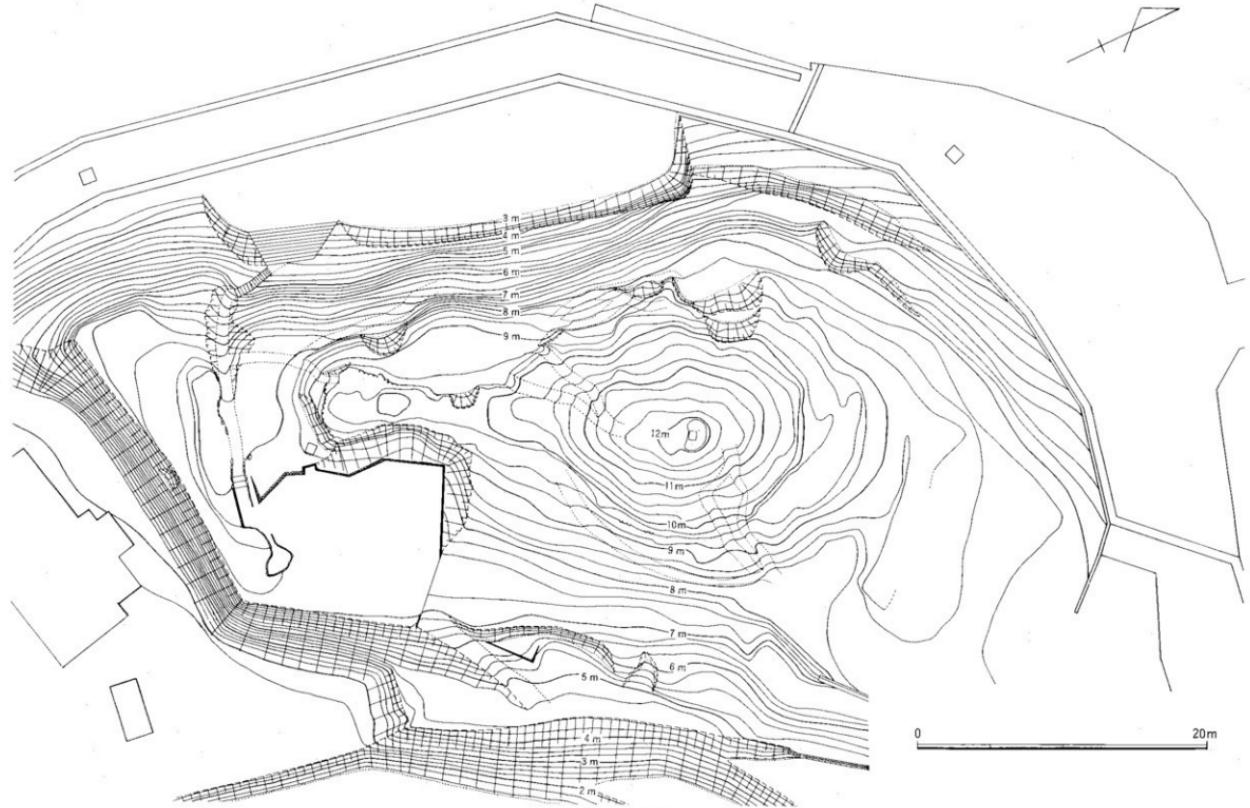


あり、周辺の開発が古墳付近に及んできている状況を鑑みて、今年度の重要遺跡確認調査として当古墳の測量調査を実施した。

トラバース杭の設定は、後円部頂上の中心点と墳丘周囲の任意の6点とを閉合させて行い、第1次トラバースとした。また、古墳周囲の急峻な崖面外に第2次トラバースを設定し、両者を古墳の東・西・北側3面で閉合させ、誤差修正を行った。レベル移動は、古墳の南約200mを通り県道津田白鳥引田線¹上のB・M(No.122-5)を基準として行った。センターは25cmおきである。

古墳の現状は、後円部は西裾付近でやや崩壊が顕著であったが、北及び東側は傾斜変換点が明瞭であり、一部基底部付近の旧状を留めていると思われる列石、石積みが認められた。くびれ部は西側はかなり転落石等の堆積が認められるが、東側はほぼ原状のくびれ状況を示しているものと考えられた。前方部については、東側が宅地造成のため基底部周辺を削り込まれており、また積石の抜き取りによる低平化が進んでいる。しかしながら、西側及び南側端部については、基底部を画していたと思われる列石が認められた。

後円部及び前方部で認められたこれら列石は、下端レベルがほぼ9.5mで統一されており、これを基底部に想定し規模、形態等の復元を行う。墳丘は主軸をN28°Eにとり、全長33m、後円部径16m、同高さ約3m、くびれ部推定幅4.5m、前方部長17m、同残存高0.8m、端部推定幅8mに復元しうる。形態的には前方部が端部より約5m北の地点で外側に屈曲し、いわゆる撥形の形態が明瞭に読みとれる。また、前方部が後円部に比べ低平で細長い点も指摘でき、これらは古式古墳に共通する特徴と言えるが、それらの中でも特に軽狭であるところが特徴的である。後円部については基底部及び頂上付近でコンターが密になるため、2段築成であったと考えられる。



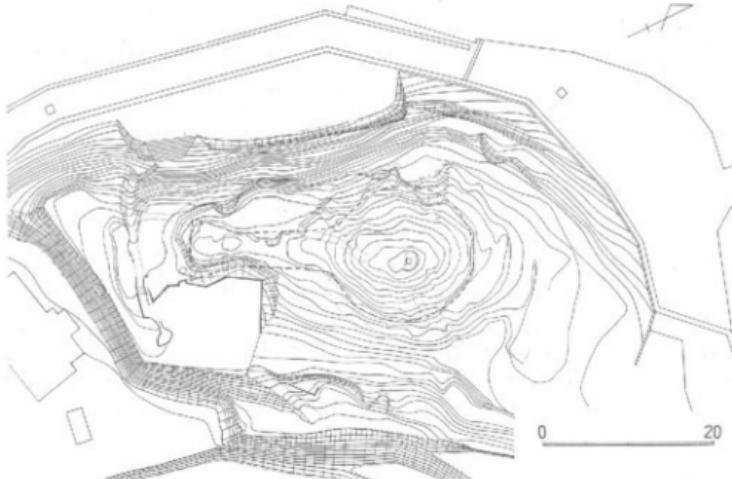
第2図 墓丘測量図

8. まとめ

鶴の部山古墳は、撥形に開く前方部等からみて古墳時代前期でも古い段階に位置づけられる可能性が強く、津田湾岸の古墳群の形成、発展のみならず、本県の古墳文化形成を考える上でも欠くことのできない古墳である。また、古墳の築成が後円部2段、前方部1段であること、両者の基底部は列石を同一レベルに設定していること等、積石塚築造に関する知見を得たことは、今後他の積石塚と比較・検討を行う上で重要な視点となるであろう。

鶴の部山古墳の遺存状態は、後円部については比較的良好であるが、前方部は崩壊が著しい状態にある。また東西西側は急峻な傾斜地であり、特に西側については掘削による崖面が墳丘基底部に迫っている状態にある。従って、今後古墳の保存については、古墳部分のみならず周辺の傾斜部の掘削、崩壊についても配慮する必要がある。

(國木)



第3図 墳丘復元推定図



第4図 鶴の部山古墳遠景（西から）



第5図 西側くびれ部列石

鴨部南谷遺跡

1. 所在地 大川郡志度町大字鴨部字田中
2. 調査主体 志度町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年12月7日～12月26日
4. 調査面積 400m²
5. 調査担当者 文化行政課技師 塙木健司
6. 調査に至る経過

当遺跡は県営整備事業に伴い、国庫補助による遺跡詳細分布調査で新たに発見されたものである。県教育委員会は、7月7、8日に現地踏査を実施し、扇状地形を呈する安定した地形である当該地に遺跡の所在を推定し、7月20日に80m²の試掘調査を実施した。この調査では遺

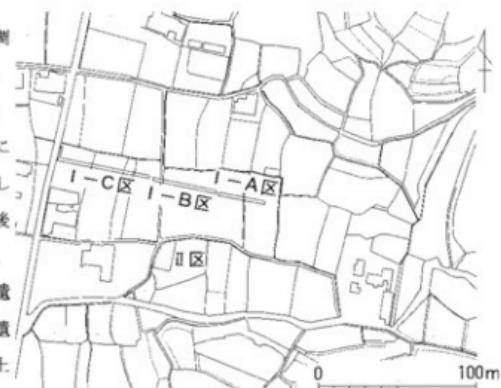


第1図 遺跡の位置

構の所在は確認されなかつたが、大規模な切土を行う周辺の工事の際には立会調査の必要性が認められた。この所見に基づき、県教育委員会は10月19日に工事立会を行い、扇状地先端付近で多量の弥生土器包含層を確認するとともに、扇状地を縱断する仮排水路掘削部分の立会等でおおよその遺跡範囲を想定した。その結果をもとに、土地改良課と設計変更に関する協議を実施し、遺跡のほとんどの部分は現状保存されることとなつたが、本水路構築及び水田造成のために掘削がやむを得ない400m²について本調査を実施することになった。

7. 調査結果の概要

水路部分（I区）の調査では、調査区のほぼ全域で遺構を検出した。溝状遺構、ピット、土括等であり、調査区を横断する2条の自然河川によって画された微高地より検出している。時期的には弥生時代後期後半段階の遺構がほとんどであるが、I区東端付近では中期段階の溝状遺構を2条検出している。この溝状遺構の上層には約20cmの厚さの黒色土の堆積層があり、同層が多量の後期後半段階の遺物を含む土器層



第2図 調査区位置図

であるため、付近に居住域の存在を示唆するものである。

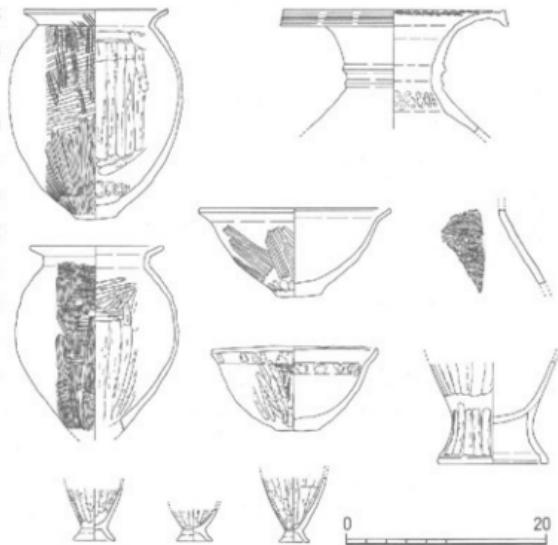
水田造成部分（II区）からは堅穴住居、掘立柱建物各1棟、溝状遺構2条等を検出した。堅穴住居は5.3m×4.7mのやや長方形を呈する2本主柱で、ベッド状遺構、中央土塁も構築されている。土師器、製塙土器、砥石等を検出しており、古墳時代前期中葉頃の住居跡と思われる。

8.まとめ

鴨部南谷遺跡は鴨部地区で初めて確認された集落遺跡であり、地域文化を考える上では欠くことのできない遺跡である。弥生時代中期から古墳時代前期を中心とするが、同時期の遺跡で扇状地上の立地は珍しく、遺跡占地の面でも興味深い遺跡である。

遺跡は扇状地中央～先端にかけて広範囲に広がることが考えられるが、弥生時代中期後半段階の居住域が、当該地の南北西側の丘陵傾斜部に所在する可能性もあり、今後はこの点にも留意した保護措置が必要である。

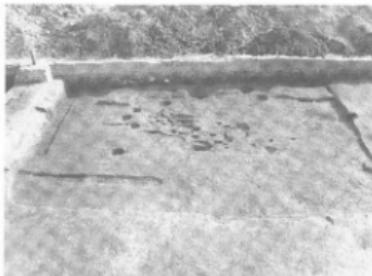
(國木)



第3図 I区土器灌出土土器実測図



第4図 I区土器灌遺物出土状況



第5図 II区堅穴住居跡

高松東バイパス等建設予定地内遺跡

1. 一般国道11号高松東バイパス建設工事に伴う確認調査一覧表

番号	開発工事名	遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査面積
1	高松東バイパス2工区	太田下・下所遺跡	高松市太田下町 ・三条町	平成元年1月19日 ～1月31日	700m ²
2	" 5工区	東山崎・ 水田遺跡	" 東山崎町	昭和63年6月20日 ～7月20日	1,620m ²
3	" 7工区	前田東・ 中村遺跡	" 前田東町	"	1,540m ²
4	県道高松長尾大内線	なし	" 小村町	昭和63年7月9日 ～11日	206m ²

2. 調査主体 香川県教育委員会

各工区の名称

3. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和

4. 調査に至る経過

●高松東バイパス

高松東バイパスは全体を7工区に分け、それぞれ右表のような名称で呼んでいる。上天神地区は昭和61年度に確認調査を実施し、その後、62、63年度に本調査が実施されている。三条～前田東地区については、昭和62年5月29日に建設省香川工事事務所より発掘調査の協力依頼がありこれを受けて昭和63年3月7日に埋蔵文化財の包蔵状況と発掘調査計画について県教委が通知をしている。この間62年度に3・4工区につい

1 工区	上天神
2 "	三条太田
3 "	林
4 "	六条
5 "	東山崎
6 "	前田西
7 "	前田東



調査対象位置図 (1-2工区 2-5工区 3-7工区 4-県道)

て確認調査が行われ、現在本調査を実施している。今年度は2・5・7工区について確認調査を実施し、現在5・7工区について発掘調査が実施されており、2工区については来年度実施予定である。

●県道高松・長尾・大内線

高松東バイパス5工区に接続する県道高松・長尾・大内線の建設計画があり、6～7月の国道の確認調査と合わせて実施することとし、香川県土木部道路課と協議を行った。建設計画は東山崎地区と小村地区の2か所である。昭和63年5月18日に現地確認したところ、東山崎地区は作付けのために冠水状態のため、国道試掘結果により判断することとし、小村地区のみの試掘調査を実施することとなった。

5. 調査結果の概要

●高松東バイパス三条太田地区

当該地は高松平野のはば中央部に位置する。香東川が形成した扇状地で、標高15m前後、南西から北北東方向へ緩やかに傾斜している。調査対象地28,400m²の内、買取済み部分に合計22本のトレンチを設定した。

ほぼ全域に下部砂礫層（⑥層）が見られ、この層の上面はかなり凹凸がある。砂礫層上部に堆積している④層が遺構面、中世～近世の柱穴、土坑、溝状遺構を検出した。遺構面上部の③層は削平されて部分的にこっているに過ぎないが、中世土器を包含している。また、調査区東端部では⑥層を掘り込む土坑があり、この土坑内から弥生土器が出土している。

調査対象地中央部の南側に土器散布の見られる微高地があり、当該地の遺構のあり方から考えて、集落域の縁辺部に位置するのではないかと思われる。



三条太田地区風景

①	耕作土
②	床土
③	褐色砂質土
④	灰褐色土
⑤	黒灰色粘質土
⑥	暗灰色砂礫
⑦	灰色砂
⑧	褐色砂礫

基本的土層模式図

●高松東バイパス東山崎地区

当該地は春日川と新川、吉田川に挟まれた地域で、これらの河川によって形成された氾濫平野の中央部に位置する。

1～4工区で見られた下部砂礫層がここにはなく、ほぼ全域にわたり表上下に洪沢砂の堆積が見られる。調査区西部ではこの砂層の堆積が厚く、遺構は認められなかったが、中央部以東ではこの層上部の淡黄褐色粘質土（またはシルト）上面が遺構面で、中世～近世のおびただしい柱穴群、溝状遺構等を検出している。遺物から見て中世前半の時期が主流である。

①	耕作土
②	床土
③	灰褐色土
④	褐灰色土
⑤	淡黄褐色 粘質土
⑥	褐色砂質土
⑦	灰白色シルト

基本的土層模式図

これらのことから、中世段階以前の洪水の後開発が開始され、中世前半の時期には集落域となった地域であろう。

●高松東バイパス前田東地区

当該地の大部分は前田山の南麓の南西に下る丘陵の下位面にあたる。西端は調査地北部に痕跡を残す河川が形成した小規模な扇状地、東端は立石山南西の深谷から続く谷状地形である。

調査地周辺は古墳の密集地であること、調査地内に弥生土器の散布地として知られる「根子堂遺跡」が所在すること、調査地の北200mのところに奈良時代の寺跡である「宝寿寺跡」があることから、弥生～古代にわたる遺跡の所在が予想された。

西端、扇状地部分の土層は右図のとおりであり、砂層の堆積が厚く全体に軟弱であった。遺構ではなく、遺物は南東部隅で若干の中世遺物がみられたとのどまる。また、東部高台では床土直下に巨礫を含む黄白色粘質土があり、遺構面が削平されているようである。

①	耕作土
②	床土
③	黒色砂
④	暗褐色粘質土
⑤	暗褐色砂質土
⑥	青灰色粘質土
⑦	黒色粘土

西端部土層模式図

その他の部分では、おおむね右図のような上層堆積を示す。床土下に遺物の豊富な古代～中世の包含層がある。その下位には弥生時代終末期頃の遺物を多量に包含する黒色砂質土層（⑩層）があり、これを掘り込む古代～中世の溝状遺構、柱穴等が検出された。他に、不定形の土坑（古墳時代初頭の高杯、壺、小型丸底壺の完形が一括して出土している）、井戸（奈良時代の土器類・須恵器出土）等を検出している。また、下層に黄褐色粘質土があり、遺物は出土していないものの、溝状遺構1、柱穴3を検出している。

①	
⑧	褐灰色砂質土
⑨	灰褐色砂質土
⑩	黒色砂質土
⑪	暗褐色砂質土
⑫	黄褐色粘質土

基本的土層模式図

東の谷部では黒色砂質土（遺構面、溝状遺構・柱穴等検出）のある部分と湿地状の堆積が見られる部分がある。東端部で東への落ち

があり、土師器や亀山焼と思われる土器片が出土している。

弥生終末～古墳初頭の包含層の状況から、この地区的北部の丘陵上位部分には集落がある可能性がある。また、奈良時代の朱塗りの土師器を出土した井戸等から、宝寿寺との関連も予想され、今後の調査結果に興味が持たれる。

●県道高松・長尾・大内線小村地区

春日川と吉田川に挟まれた地域で、方形の地割りが残る。当該地の西200mのところに旧河川の流路と思われる地割りの亂れが見られる。調査対象地に一部が作付けのために冠水していたため、そこを避けて4本のトレーナーを設定した。

基本的に右図のような土層堆積である。遺物は耕作土、床土内から近世の磁器が数点出土したのみで、他の層からの出土ではなく、遺構も認められなかった。

各トレーナーの深掘り地点の堆積を見ると、南端寄りにやや高い点があり両端に落ちる形を示すが、これは現地表の高低差と符号する。土器が出土していないため時期は不明であるが、小規模な河川が埋没したものか、浅い谷状地形に砂粒が堆積したものであると思われる。

①	耕作土
②	床土
③	淡黄灰色土
④	暗灰褐色砂
⑤	暗褐色砂
⑥	黑灰褐色砂
⑦	灰色砂

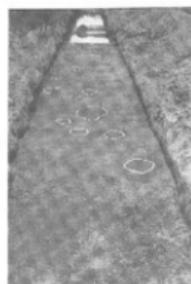
基本的土層模式図



三条太田地区



東山崎地区



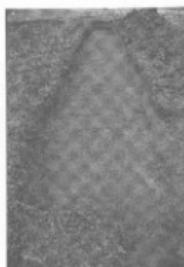
東山崎地区



前田東地区



前田東地区土坑



小村地区

福家東羽間地区

1. 所在地 綾歌郡綾南町大字福家字東羽間
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年10月13日
4. 調査面積 18m²
5. 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
6. 調査に至る経過

昭和61年7月7日付建四香第1008号で、建設省香川工事事務所長より県教委教育長あてに、一般国道32号綾南バイパス建設予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照合文書が提出された。それを受け、

県教育委員会は昭和61年10月23日に路線内の分

布調査を実施し、昭和62年1月29日付61教文取第104号で試掘調査を実施する必要がある範囲を回答した。その後、昭和63年10月4日に再度路線内の分布調査を実施し、さきの分布調査で古墳が所在する可能性を指摘していた当該地を試掘調査対象地として抽出した。

7. 調査結果の概要

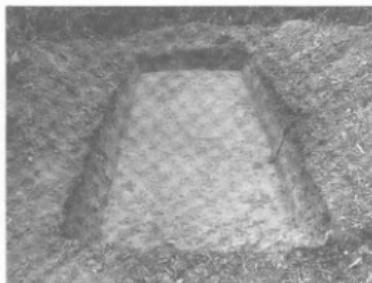
挿頭山山頂部及びその北側斜面部の2か所に、各々12, 6m²のトレンチを設定した。いずれのトレンチも、腐食土下に20~40cmの疊混り土が堆積し、以下黄灰色粘質土(地山)に至る。また、遺構・遺物は両トレンチともに皆無であった。

8. まとめ

試掘調査の結果、遺構・遺物は全く検出されず、土層においても人為的な盛土・擾乱等は認められなかった。従って、当該路線建設に伴う国分寺町内の本調査は不要と判断された。(國木)



第1図 遺跡の位置



下屋遺跡

- 所在地 大川郡長尾町昭和字下屋
 - 調査主体 香川県教育委員会
 - 調査期間 昭和63年9月21日（1次）
同10月17日～18日（2次）
 - 調査面積 165m²
 - 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
 - 調査に至る経過

当該地には『長尾町誌』において全長100mの前方後円墳と記載されている大宮古墳が所在するが、県道高松長尾大内線改良工事においてその前方部を寸断する計画が上がったため、事前に周溝等の確認のため試掘調査を実施するこ



とで道路課と調整済であった。ところが、試掘調査対象地として指定していた水田の東側隣接地において、掘削工事実施中に多量の須恵器の出土をみたことから、緊急に第1次試掘調査を実施することとなった。その結果、新たに集落遺跡の所在が確認されたため、道路課より9月19日付で遺跡発見通知が提出され、この地区については事前調査を実施することで協議が整った。その後、古墳の有無を確認し道路課との協議資料を得るために、周辺推定地及びマウンド上において第2次試掘調査を実施した。なお、古墳の有無について追認資料を得るために、路線外において町教育委員会が併行して確認調査を実施している。

7. 調査結果の概要

第1次調査で設定した1トレでは、路線に斜行する形の落ちの肩が認められ、両側の安定した部分で柱穴、土塙等を検出している。落ちの部分は東に向かって次第に厚さを増す黒色粘質上の堆積が認められ、同層中からは多量の須恵器、弥生土器等の遺物が出土した。この遺物包含層が認められるのは、落ちの肩より10~15m東までの範囲であり、以東は厚い砂の堆積層に変わり、2トレに至っては1.5m以上の砂層堆積が認められ、遺物も検出されなかった。

3~6トレは第2次調査で設定したトレーンチである。4トレでは東端付近5mの範囲で柱穴群を検出している。他のトレーンチでは少量の遺物出土をみたが、遺構は検出されなかった。

遺物はほとんどが黒色粘質土からの出土である。須恵器が大半を占めるが、弥生土器、中世土師器も少量出土している。弥生土器（第3図1）は完全な平底を呈した壺形土器である。口縁部は不明であるが、内面ヘラケズリを施すもので、後期段階のものであろう。須恵器は時期的に6世紀末頃の一群と7世紀末～8世紀初頭頃の一群に大別される。

7. まとめ

下屋遺跡は出土した遺物からみて弥生時代後期及び古墳時代後、終末期を中心とした集落遺跡である。遺構は高高地東縁辺部の柱穴群、土塀のみであったが、3トレ及び4トレ西半部については水田造成のため遺構が削平を受けた可能性が強い。また、各遺構は耕作土直下の地山面上から全て検出しているため、どの時期に属する遺構であるのかは不明である。

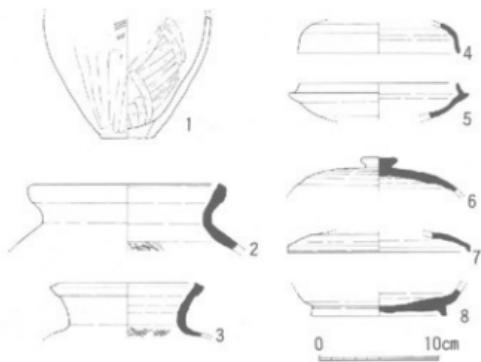
当該地は鴨部川右岸の自然堤防上に立地し、遺跡範囲は川沿いに帯状に延びるこの自然堤防東縁辺部に広範囲に広がる可能性が高い。町教育委員会が実施した試掘調査のうちBトレ東端付近でも多数の柱穴を検出しており、この遺跡範囲推定に関する追認資料となるものである。

古墳の有無については、いずれのレンチからもその所在を想定する遺構、遺物は全く検出しておらず、その可能性はないものと考えられる。古墳状に延びる高さ1~1.5mのマウンドは、帯状の自然堤防東西両側の水田造成の際に地下げした結果形成されたものと考えられる。

なお、路線内の集落部分約1,800m²については来年度本調査を実施する予定である。（國木）



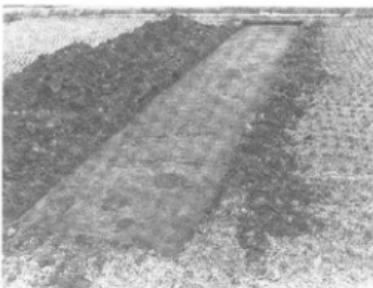
第2図 トレンチ配置図（A, Bトレは町教委調査）



第3図 遺物実測図



第4図 1 トレ内土塙等検出状況



第5図 4 トレ内遺構検出状況



第6図 A トレ完掘状況



第7図 B トレ遺構検出状況

伊喜末遺跡

1. 所在地 小豆郡土庄町伊喜末
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月25日
4. 調査面積 20m²
5. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和
6. 調査に至る経過

伊喜末遺跡は伊喜末八幡山の南麓から南方山裾方向へ形成された砂洲上に立地する、縄文～古墳時代の遺跡である。昭和16年に縄文土器が採取されたことにより遺跡の存在が想定されその後、昭和18年に実施された確認調査により発見された遺跡である。

県道屋形崎・小江瀬崎線拡幅工事が遺跡隣接地（砂洲背後の湿地部分）で計画されたため、当初、工事立会を実施する予定であった。11月8日に小部浜遺跡隣接地で実施されている、県道土庄・内海線改良工事の立会の際に伊喜末遺跡の現地踏査を行ったところ、工事予定地で中世土器（土壙片）が見られたことから確認調査を実施することとなった。

7. 調査結果の概要

調査対象地に幅1mのトレンチを3本設定した。

第2トレンチ（7m²）の土層堆積は右図のとおりである。現表土下約120cmのところから、近世磁器が出土している。第④層の最下部、薄く堆積した灰色砂層直上からの出土である。遺物は見込部分を蛇の目状に釉ハギした肥前系の染付皿で、江戸時代中頃のものである。また、②層には土師質の土器小片が包含されており、現地踏査時に発見した中世土壙片もこの層のものと思われる。④層以上は平らに続く層で造成土であろう。⑤・⑥層は砂層で、小礫や植物遺体を含む。各面とも遺構は検出していない。

第1トレンチ（6m²）は④層以上が層厚80cmである点を除けば、第2トレンチとはほぼ同様である。各層とも遺構・遺物は認められなかった。

第3トレンチ（7m²）では③層より土師質土器片、近世陶器



伊喜末遺跡位置図

花崗土
褐色土
灰褐色土
暗褐色土
灰色砂
青灰色砂

第2トレンチ土層模式図

片が出土している。④層下に青灰色粘質土層があり、植物遺体を含む。その下部は暗青灰色砂層である。遺構は認められなかった。

各トレントとも砂層からの湧水が激しく、160cm以上の掘り下げは断念せざるを得なかった。

8.まとめ

西へ突き出した小半島の南側の付け根、西に伊喜末八幡山、東は皇踏山から続く山脈に挟まれた南西向きの海浜である。伊喜末八幡山から南へ伸びた砂嘴の発掘調査により、縄文前期から古墳時代の複合遺跡であることが確認されている。当該地はこの砂嘴背後の湿地のはば中央にあたる。周辺の大部分は地上げされて畑地になっているが、地上げされていない部分もあり、未だにアシの生える荒れ地となって放置されている。

調査の結果、標高1.4mの位置で近世遺物が出土した。その下部は植物遺体を含む湿地状の堆積であることから、近世段階には当該地が湿地であったと言える。その後、徐々に現在の標高2.6mまで地上げが行われたのであろう。今までの調査で確認されている縄文包含層のレベルである標高約1m前後（新編香川叢書P65参照）まで掘下げたが土器の包含層は確認できなかつた。また、近世以前の土地利用を示す痕跡は認められなかつたことから、伊喜末遺跡の範囲は当該地までは広がらないと考える。県道工事は来年度以降、南側への延長が計画されているため、より砂洲に近い部分での確認調査により伊喜末遺跡範囲の北限が明確にされるであらう。

伊喜末遺跡は海浜の遺跡として、その立地条件の沙弥ナカンド浜遺跡や大浦浜遺等との類似が指摘されている。しかし、これらの遺跡の背後が丘陵によって完全に遮断されているのに対して、伊喜末遺跡は両側に丘陵が迫っているものの遮断はされず開かれている点で異なつてゐる。沙弥ナカンド浜遺跡等では砂洲により海流が遮断されてできた背後湿地の土地利用が見られる。

伊喜末遺跡では、東側の皇踏山から出る河川が北部へ流れ出ていることから、砂洲の形成によって海流が遮断されたとは考えにくく、北からの流入のために背後湿地が形成されず、開発が遅れたことも考え得る。現県道の東側にある旧道以西は近世まで開発が行われず、したがつて、集落等があるとすれば、旧道以東に所在する可能性がある点を指摘しておく。



(安藤)

西又遺跡

1. 所在地 坂出市川津町
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年9月26日、11月22・24日
4. 調査面積 65m²
5. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和
6. 調査に至る経過

県道宮熊・宇多津線拡幅工事は今年度当初の公工共土木工事の予定にはなかったが、瀬戸大橋開通後の近接道路網整備の一環として工事が急がれることとなった。7月11日に県道路課より今年度対応の中し入れがあり、8月30日に県教委が分布調査を実施した結果、遺跡所在の可能性があったため確認調査を実施した。

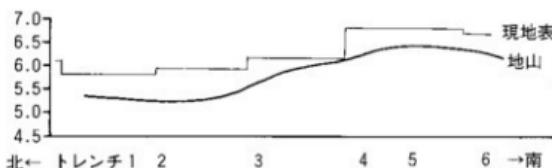
7. 調査結果の概要

当該地は丸龜平野の東北部、飯野山の北麓から続く平野で、大東川の西岸にあたる。大東川の流域には約80cm程度の段差が明瞭に見られ、当遺跡はその段差上に位置する。また、調査地北部では前池から続く旧河川の流路と思われる地割りの亂れが見られる。

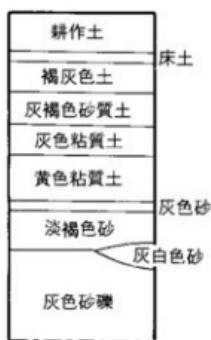
調査区を3地区に分け、北から1～3区とした。トレンチは幅1mで1区6本(36m²)、2区2本(13m²)、3区に2本(16m²)を設定した。調査2次に分け、1次調査で2区を、2次調査で1区と3区の調査を実施した。

1区(第1～6トレンチ)では現地表面から25～62cmの深さのところに黄色粘質土がある。この土層以下は無遺物で、この層の上面が遺構面であると言える。

これをもとにして旧地形を考えると、下図のようになる。



1区旧地形復元模式図



第2 トレンチ土層模式図

第1～3トレンチ部分は低地、第4～6トレンチ部分は微高地となる。低地部分では地割りから自然河川の流路を想定したが、肩は検出できなかった。黄色粘質土上に須恵器片を含む褐灰色土がある。微高地部分では近世の柱穴5（埋土灰色砂質土）を検出したが、埋土内から近世以降の遺物が出土していることから、かなり新しい時期のものであると思われる。

2区は7・8トレンチとも耕作土下に15cm程度の擾乱土（近世遺物を含む、造成土か）があり、その下部が黄色粘質土となる。遺構は全く検出されず、遺構面上部が削平されている可能性がある。

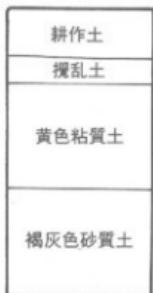
3区では耕作土、褐灰色土の下部が黄色粘質土となる。この層を掘り込んで9トレンチでは溝状遺構1、10トレンチでは柱穴3溝状遺構を1を検出した。遺構の埋土はいずれも暗茶褐色土である。柱穴よりサスカイト片と炭が、溝状遺構より弥生土器底部が出土している。

8.まとめ

当該地は緩やかに北へ下る平地であるが、地形の高低を細かく見ると調査対象地中央部分が微高地で、旧地形も同様であることが分かった。現在の集落は微高地部分に密集している。その集落の密集地にあたる2区では、耕作土の下に造成土と思われる土があり、遺構上面部が削平されている可能性もある。

3区では弥生時代の遺構が検出されたが、これは大東川西岸の段差縁辺部にある本村東遺跡（周知の遺跡）と同様の立地である。また、元結木遺跡（大東川改修工事に伴う調査で確認・本書P38）も同様であることから、これら以外の大東川西岸段差縁辺部にも遺跡が所在する可能性がある。

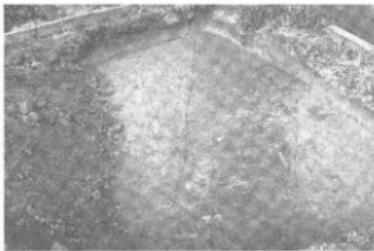
（安藤）



2区基本土層模式図



3区基本土層模式図



備中地遺跡

1. 所在地 仲多度郡琴南町造田字備中地
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月25日
4. 調査面積 36m²
5. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和
6. 調査に至る経過

備中地遺跡は昭和28年、煙草乾燥場建設に伴う掘削・整地作業中に弥生土器が出土したことにより発見された周知の埋蔵文化財包蔵地である。その後、当遺跡内で県道府中・琴南線拡幅工事が計画され、昭和60年度に試掘調査を実施した。その

結果をふまえて昭和61年9月～10月に琴南町教育委員会が主体となり、県教委の指導のもとに右図1部分で発掘調査が実施されている。

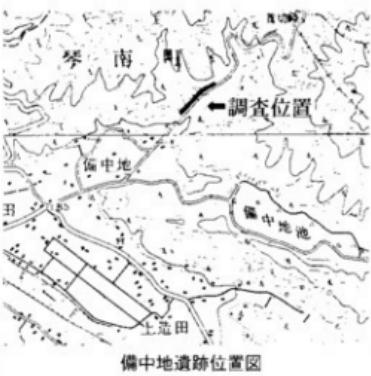
今年度は同県道の北東延長部分（昭和28年土器出土地点を含む）の拡張工事が計画されたため、確認調査を実施した。

7. 調査結果の概要

造田盆地の北東部に位置し、岡ノ峰と城山に挟まれた地域である。南側にある城山の山裾は急斜面で谷部へと続くが、北側の岡ノ峰の山裾は比較的緩やかな斜面であるため、段階状の耕地化されており、当該地はその斜面の谷部へと続く先端付近である。調査対象地に幅1mのトレンチを6本設定した。

第1トレンチ（6m²）は付近で前述の弥生土器が出土したとする点である。工事中の発見であるため、遺構の有無や出土状態については不明である。現況を見ると約1m程度下げた後30cm程度花崗岩を敷いて造成していることが分かる。掘削後の整地中に出土したと伝えられることから、暗褐色土層付近からの出土が推測できるが、遺物は出土しなかった。さらに下部の灰色砂層から流れ込みと思われる摩滅した若干の中世土師質小皿片が出土している。

昭和59年5月に第1トレンチ隣接地（東側）で行った試掘の際にも遺構・遺物は検出されず、今回の試掘と同様に砂層の堆積と少量の中世遺物が確認されたのみである。（註）



備中地遺跡位置図

造成土（花崗土）
暗褐色土
淡褐色砂質土
黃褐色土
灰色砂

第1トレンチ土層模式図

第2～6トレンチ（合計30m²）では、第4トレンチで砂層上部に花崗土があること、第6トレンチで暗褐色土と砂層の間に粉状の黄褐色土があることの例外を除けば、各トレンチとも基本的に右図のような土層堆積である。

褐色土から土師質土器片、近世陶器片（擂鉢）が、灰色砂層から土師質土器片が出土しているが、全体に遺物量は非常に少ない。

平面、断面観察により遺構の検出につとめたが、認められなかった。

8.まとめ

今回の試掘調査では、昭和28年の弥生土器出土位置より下部の砂層から中世遺物が出土するという結果となった。59年の隣接地での試掘調査でも同様の結果を得ている。土器発見が地表下30～40cmであったことが正しければ、その80cm以上下部に中世土器を含む層があることは自然な状態では考えられず、客土等何か特殊な状況を想定せざるを得ない。いずれにしても、第1トレンチでは現在遺跡所在の痕跡は見られなかった。また、その他のトレンチでも表土層に若干の近世遺物があるものの、安定した地盤もなく、遺構・包含層とも認められなかった。

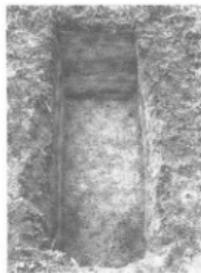
なお、地元の人の話によれば、現県道の工事の際にかなり土盛りが行われたが、県道北側の土を使用した際に多数の土器が見られたとのことである。確かに、第1トレンチの北西部分の畠の表面には多数の土器、須恵器の散布が見られる。

これらのことから、当該地は中世段階まで自然の堆積作用下にあった谷部の狭い扇状地で、中世以降の耕作地化が行われたと推定する。当該地以西の岡ノ峰根部に遺跡の中心がある可能性を指摘しておく。

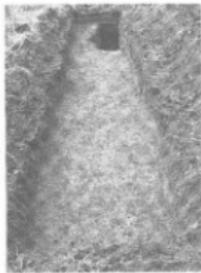
（安藤）

耕作土
褐色土
暗褐色土
淡褐色砂
灰褐色砂
灰色砂質土
灰色砂

基本的土層模式図



第3トレンチ



第5トレンチ

（註）備中地遺跡発掘調査報告書 P5 琴南町教育委員会 1988.2 参照

千町遺跡、了智坊遺跡

1. 所在地 大川郡大川町富田中
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年7月28日～8月1日
4. 調査面積 434m²
5. 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
6. 調査に至る経過

当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である千町遺跡が所在するが、今年度の県営圃場整備事業対象地となつたため、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査を実施した。現地踏査は昭和63年7月5日～6日に実施、河岸段丘上の安定した約10haの地域について試掘調査の必要性が認められたため、併せて10か所の調査区の抽出も行った。

7月22日には当該地権者に対する説明会を実施し、同意を得た上で試掘調査を実施した。

7. 調査結果の概要

1トレでは、溝状遺構1条及び多数のピットを検出した。ピット中より土師器碗（第3図1）が出土しており、中世後半の遺構である。遺構面は床上直下である。3トレ及び8～10トレではほぼ全域でピットを検出している他、9トレでは径70cm、深さ40cmの土塙を3基検出し、塙内より七頭器、陶器、寛永宝等が出土した。5トレからは床土直下で幅2m、深さ30mの溝状遺構を2条検出している。溝内から出土した上器（第3図2、3）は、外反気味に直立する頭部が口縁付近で外側に屈曲する壺で、外面はハケ目調整をしている。弥生時代終末期のものであろう。その他のトレチでは床土下20cmまでの範囲には遺構は検出されず、特に2トレでは厚く砂層が堆積し湧水も顯著であった。同層中には土師器、陶器片等を包含する。



第1図 遺跡の位置



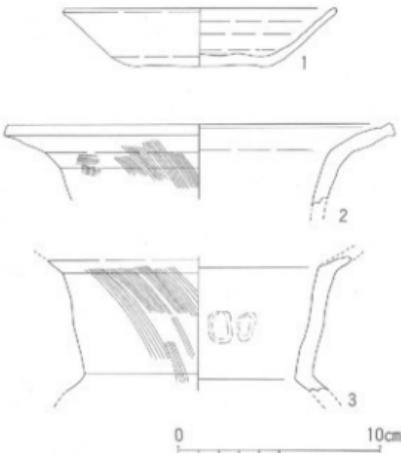
第2図 トレチ配置図

8.まとめ

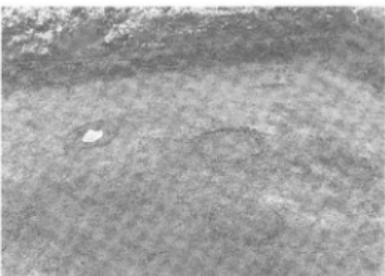
今回の調査は、調査面積が狭小であったため遺構の内容、意義等を明らかにすることが出来なかつたが、圃場整備対象地域内の遺跡所在状況の把握は可能であった。

事業対象地南端の1トレで検出した遺構は、さらに南部の安定した地形上に広がる千町遺跡北縁辺部を検出したものと考えられる。同遺跡が弥生時代の遺跡として周知されていることからすれば、下層においてより古い時期の遺構が所在する可能性は高い。河岸段丘上縁辺部の自然堤防上からは、帯状に延びる了智坊遺跡が新たに確認された。内容的には5トレで検出した弥生時代終末期の溝状遺構、3トレ、8~10トレで検出した近世の遺構群に大別されるため、来年度以降の周辺調査結果次第では別遺跡として把握していくべきであろう。

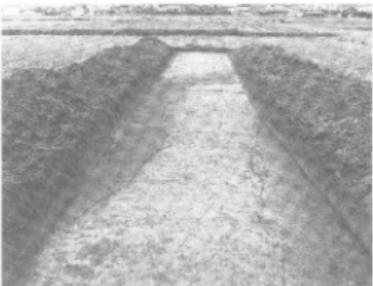
なお、今回確認された遺跡範囲は、土地改良課、地権者側の協力により全域現状保存されることになった。また、両遺跡とも周辺に広範囲に広がる可能性が強く、来年度以降の調査で確認していく必要がある。(國木)



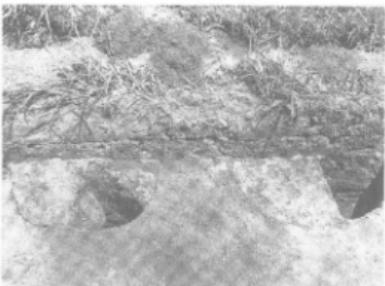
第3図 遺物実測図



第4図 1トレ遺構検出状況



第5図 5トレ遺構検出状況



第6図 9トレ遺構検出状況

須ノ又遺跡、神ノ植遺跡

1. 所在地 三豊郡高瀬町下勝間
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年8月8日～8月9日
4. 調査面積 200m²
5. 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
6. 調査に至る経過

両遺跡ともに未周知であったが、今年度の県営圃場整備に伴い、国庫補助を受けて実施した詳細分布調査で発見された遺跡である。7月14日に実施した現地踏査で2か所の低丘陵上に遺跡の所在が予想されたため、5か所の調査区を設定した試掘調査を実施した。

7. 調査結果の概要

1トレではピットとともに土師器、須恵器片を検出した。2トレはやや谷筋に下った地区であるが、溝状遺構を検出している。4、5トレでは径70cmをはかる大型ピットを含む多数のピットとともに、幅2.3mの溝状遺構を検出している。遺構面上及び溝内より古墳時代後、終末期頃の須恵器片等が出土している。3トレでは遺構、遺物とも検出されなかった。

8. まとめ

今回の調査では、1トレ周辺に須ノ又遺跡、4、5トレ周辺に神ノ植遺跡という古墳時代後、終末期頃の集落遺跡を確認した。時期的に付近の高瀬川两岸に所在する大門、矢ノ岡両遺跡との関係が注目される。また、両遺跡ともに周辺に広がる可能性が高い。

(國木)



第1図 遺跡の位置



國 広 塚

1. 所在地 三豊郡三野町大字大見
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年8月5日
4. 調査面積 15m²
5. 調査担当者 文化行政課技師 國木健司
6. 調査に至る経過

国広塚は県営圃場整備に伴い、国庫補助を受けて実施した詳細分布調査により新たに発見された遺跡である。7月12日に実施した現地踏査により小規模なマウンドが確認された地点について、その性格及び範囲確認のため試掘調査を実施した。

7. 調査結果の概要

径3m、高さ1.2mのマウンド周間に放射状に設定したトレーナー内では、周溝等の遺構は検出されなかった。マウンド裾部のトレーナーでは、小児頭大の扁平な塊石を2段程度積み上げた石列を検出したが、直列ではなく平面的に敷き並べたものである。石列上部には50cmの厚さに黄灰色粘土を堅く敲き締めた盛土が認められる。マウンド中より陶器、土師器上鍋片等が出土している。

8. まとめ

マウンドについては、石列が2段積みと一樣であること、平面的に敷き並べられていること、大型石材が検出されなかったこと等から古墳に伴うものとは考え難い。出土遺物からすれば、中・近世代に属する所謂「塚」と考えるのが妥当であろう。

(國木)



第1図 遺跡の位置



第2図 調査前の状況



第3図 石列検出状況

元結木遺跡

1. 所在地 坂出市用津町
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月24日
4. 調査面積 14m²
5. 調査担当者 文化行政課主任技師 安藤清和
6. 調査に至る経過
中小河川大東川改修工事は当初は来年度工事予定であったが、6月23日に県河川課より四国横断自動車道工事との関連で今年度一部着手の意向が伝えられ、対応することになった。



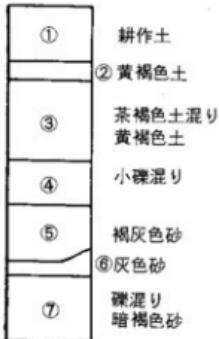
元結木遺跡位置図

8月30日に分布調査を実施した結果、大東川流域には比高80cm程度の段差があり、このラインは現在の地割りに沿って明瞭に認められる。下川津遺跡の予備調査ではこの段差下の確認調査を実施している。それによると、耕作土下は間層を挟んで粘質土と砂の互層となり、段差上で見られる地山（黄色粘土）が段差下では見られないという結果を得ている。当該地の分布調査でも段差下では土器散布等も見られなかったため、段差上の確認調査を実施した。

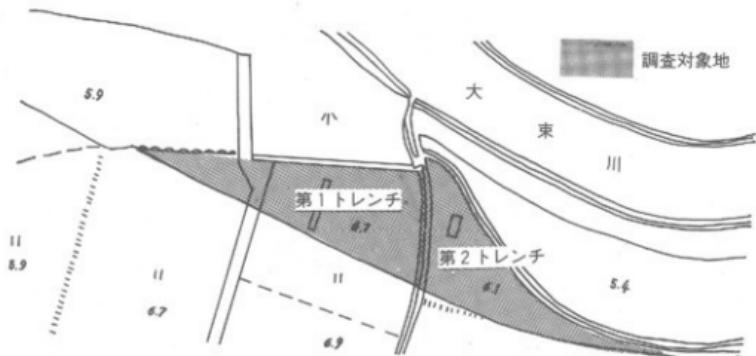
7. 調査結果の概要

調査対象地に下図のとおり幅1mのトレンチを2本設定した。
第1トレンチ(10m²)では耕作土直下の黄褐色土上面で暗茶褐色埋土の溝状遺構1(幅125cm、深さ30cm)、柱穴4(直径20~30cm)と、褐色土埋土の溝状遺構1(幅45cm、深さ15cm)を検出した。溝状遺構は2本とも段差ラインに沿って平行に走る。
第2トレンチ(4m²)は第1トレンチと比べて現地表面では30cm程低い。耕作土直下に第1トレンチと同様に黄褐色土があり、その上面で暗茶褐色土埋土の土坑1(不定形)を検出した。いずれも遺構も遺物の出土がなかったために時期は不明である。

第1トレンチ東端部で下部土層堆積確認のために深掘りを行った。右図のとおりである。



第1トレンチ東端部土層
模式図



トレンチ配置図

8.まとめ

当該地の北には、東岸に本四架橋建設に伴い調査され、大集落遺跡であることが確認された下川津遺跡が、西岸には古墳時代の土器散布地として知られる本村東遺跡が所在している。これらの遺跡は大東川流域の段差上にあり、当遺跡も同様の立地である。県道富熊・宇多津線拡幅工事に伴い確認調査を実施した西又遺跡も同様であり、大東川流域の段差上畠高地にはかなり広範囲に遺跡が所在することが予想される。

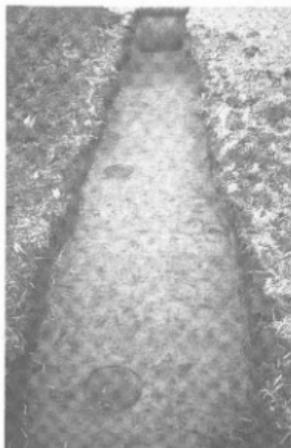
(安藤)



調査対象地風景



遺構面模式図



第1トレンチ遺構検出状況

戸形遺跡

1. 所在地 小豆郡土庄町戸形
2. 調査主体 土庄町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年6月10日
4. 調査面積 11m²
5. 調査担当者 土庄町教育委員会 川井恒夫
6. 調査に至る経過

戸形遺跡は小豆島の西端、西に小さく突き出た戸形半島にある台地状の小高い丘陵上に位置する。昭和40年に丘陵上でハンドアックスが発見されたことから知られるようになった周知の埋蔵文化財包蔵地である。

台地下東側には戸形小学校があり、体育館横の崖（台地南東部崖面）が崩れたため、町主体工事として擁壁工事が計画された。工事は台地平坦部200m²を掘削する計画であったため、県教委は町教委に対して、事前に確認調査が必要であると伝えていた。その後6月8日に町教委より、危険な状態であり早急に工事を実施したい旨の連絡があり、6月10日に県教委の指導のもとで確認調査が実施された。

7. 調査結果の概要

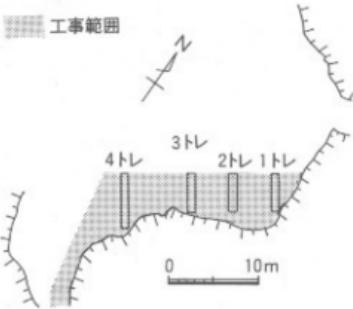
戸形遺跡の所在する山は周囲に崖を持つテーブル状の台地で、上面の平坦地は南北80m、東西50m程度の広さである。平坦部は水平ではなく北西部にピークがあり、南東方向に緩やかに下る。現在、平坦地上は雑木が生えている他、植樹された桜の木がある。表面採取を試みたが、石器は1点もなく、わずかに陶磁器片が数点見られたのみである。

調査対象地は平坦地南東部分で、約200m²である。崖面に垂直に幅50cmのトレンチを4本設定し、北から第1～4トレンチとした。

表面は淡茶褐色の腐葉土層が薄く堆積し、その下部は花崗岩風化バイラン土で、色調により2層に分層できる。さらに下部は花崗岩の岩盤となる。第1トレンチ付近で攪乱土坑（昭和57年の遊具設置の際の埋め込み土坑）があったが他に遺構はなく、各層とも石器等の遺物は認め



戸形遺跡位置図



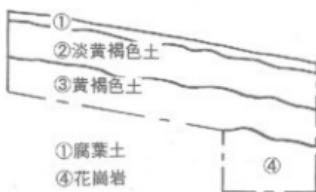
トレンチ配置図

られなかった。

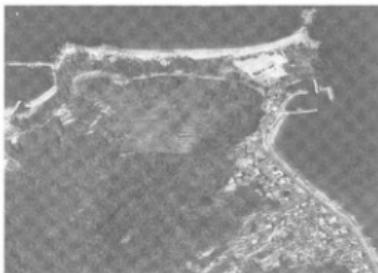
8. まとめ

昭和40年9月にハンドアックス1点が丘陵上で発見された後、同年の11月6日に発掘調査が行われている。調査位置は平坦地のピーク部分で、船底形石器1点と剝片20点程であったとのことである。その後、剝片数点が表面採取されている。表探場所は昭和40年の調査場所から東へ約10m離れた位置であった。

アスチック用具が設置された際には慎重工事が指示されたが、遺物は発見されなかった。今回の確認調査部分（平坦地南東縁辺部）でも遺物は認められなかった。これらのことから、石器が包蔵されているのは、ピーク部分とその周辺に限られるのではないかと思われる。（安藤）



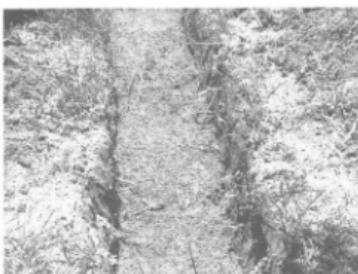
第3 トレンチ土層図



戸形遺跡全景



調査対象地



第4 トレンチ精査状況

城山古墳群

1. 所在地 綾歌郡飯山町東坂元
2. 調査主体 飯山町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年6月16日～6月22日
4. 調査面積 400m²
5. 調査担当者 町教育委員会 古本、
文化行政課技師 國木
6. 調査に至る経過

当該地は、かつて果樹園造成工事実施中に弥生時代の壺棺を出土したことから、既に周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図にも記載されていた地区である。この壺棺出土地を含む城山北麓約9haを、飯山町が運動公園建設のため造成すること



第1図 遺跡の位置

となった。そこで、町教委員会では4月22日この開発に対する対応要領について県教育委員会に指導を申し入れ、4月29日より町教育委員会が主体となって分布調査等を実施した。壺棺出土地が所在する尾根上については併せて試掘調査を実施しており、その他の地区についても遺跡の所在が推定されたため、5月24日県教育委員会職員が現地視察を行った。その結果、小規模なマウンドとともに周溝と思われる溝状遺構が数か所で認められ、さらに溝内からは埴輪片、須恵器片が検出されたため、当該地には数基の古墳が所在することが確認された。その結果に基づき、町教育委員会及び町当局が古墳群について現状保存するとの方針を打ち出すに至り、その保存活用のための基礎資料を得るとともにその他の地区について遺跡の有無を確認するため、県教育委員会の指導のもと確認調査を実施するに至った。

7. 調査の結果

試掘調査は城山山頂部及びそこから北に派生する尾根上に計5か所の調査区を設定して実施した。その結果、尾根上には遺跡の所在は確認されなかったが、城山山頂部において古墳を1基確認した。直径20m、高さ3.5mのマウンドを持つが、一部直線的な部分もあるため方墳の可能性もある。ほぼ南北方向に主軸をとる2基の小窓穴式石室を上体部とするが、今回の調査ではその上面検出に留めており、詳細な内容は不明である。平野を見降す北及び西方向の填土基底部は、地山削り出しによる明瞭な傾斜変換が認められるが、南及び東側については填土と自然傾斜との識別が困難である。遺物は中世土師器を検出したのみであり、古墳に伴うものは未検出である。

5月24日の試掘調査により古墳の所在が確認されていた地区は、城山より西北西に延びた尾根が北方向に屈曲する地点から、北へ約50mの尾根筋上に位置する。試掘調査のトレンチを再度精

査するとともに、必要に応じて新たなトレンチを設定したところ、尾根筋上に直列に配置された4基の古墳を確認したため、北から城山1～4号墳と名称を設定した。

城山1号墳は直径12m、高さ1.5mをはかる円墳で、幅1～1.6mの周溝が構築されている。トレンチで検出した周溝の埋土中より朝顔形埴輪、円筒埴輪、須恵器の各々破片（第3図1～3）を検出した。1は朝顔形埴輪の頸部で、くびれ部径18cm、くびれ上のタガ部径30.2cmをはかる。タガは下側裾部がやや広がる断面台形を呈する。内面調整はタガより上部はヨコハケ、タガ以下はヨコハケ後タテハケを施す。外面調整は磨滅のため不明である。3は疊あるいは甕の頸部と考えられる須恵器片で、断面三角形の2条の突帯間に波状文がみられる。

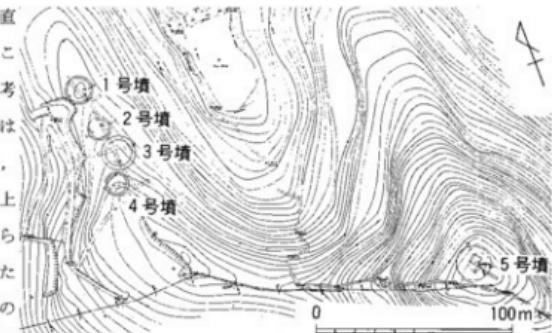
2号墳は直径10m、高さ1mほどをはかる低平な円墳で、南北東の3方向で周溝を検出しているが、1号墳ほど明瞭ではない。東トレンチより須恵器片を検出している。

3号墳は直径12m、高さ1m余の墳丘をもち、南北両側は幅約2mの周溝で、東西両側は地山削り出しによる段差で墳丘域を区画している。いずれのトレンチからも埴輪片、須恵器片等の遺物（第3図4、5）を出土している。4は3と同様突帯間に波状文が認められる。5は口径27cm、頸部径18.6cmをはかる甕で、口縁端部や下方の外間に断面三角形の凸帯をめぐらしている。肩部は外間に平行叩きが残るが、内面の同心円文は認められない。

4号墳は直径8m、高さ2mの墳丘をもち幅1mの周溝が西側基底部外を除いた部分で検出された。遺物は出土していない。

8. まとめ

今回の試掘、確認調査によって運動公園予定地内には5基の古墳が所在することが確認された。1、3号墳の周溝内から出土した須恵器はほぼ田辺編年のTK23型式、中村編年の1型式4段階に相当するものと考えられるが、出土量がさして多くなく詳細な時期決定は困難な部分もある。埴輪の内容からすれば、ほぼ5世紀後半～末頃として大過はないであろう。2、4号墳については時期決定要素はないが、直列の群集形態を採っていることからほぼ同時期のものと考えられる。これらの主体部はいずれも未検出であるが、1、4号墳については墳丘上に安山岩板石の散乱が認められたため、箱式石棺であった可能性が高い。城山山頂部の5号墳については、古墳に伴う遺物は皆無であったが、主



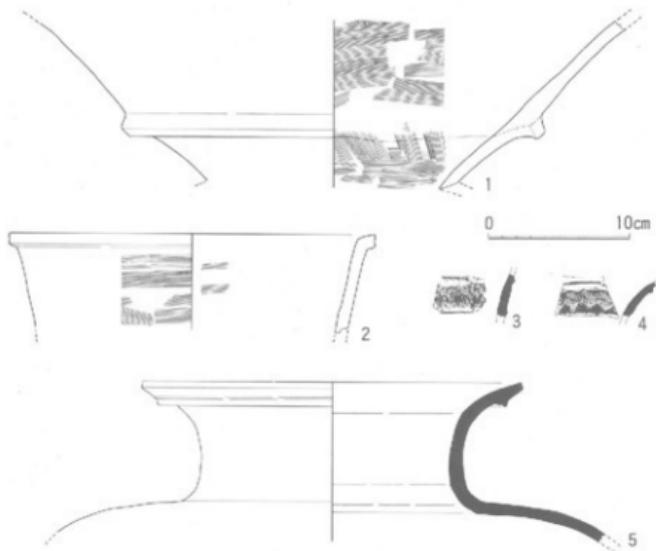
第2図 城山古墳群配置図

体部、立地等からみて1～4号墳に先行する時期と推定される。

城山古墳群は県内の数か所の地域で確認されている古式群集墳の一種と考えられ、古墳時代中期後半における地域内新興勢力の台頭を具体的に示すものである。主体部とそれに伴う遺物が不明であるため明確な意義付けは出来ないが、墳丘の規模に相違のみられる1～4号墳は古式群集墳構成の具体相とその要因となる社会体制解明のかぎを握るものと思われる。

また、ほぼ南北方向に主軸をもった5号墳の小堅穴式石室は、県内における東西方向優位という特徴に波紋を投げかけるものであるといった興味深い問題点を含んでおり、今後の調査・研究が期待される古墳群である。

(國木)



第3図 遺物実測図



第4図 1～4号墳全景（北から）



第5図 5号墳墳丘石室

御產鹽山古墳

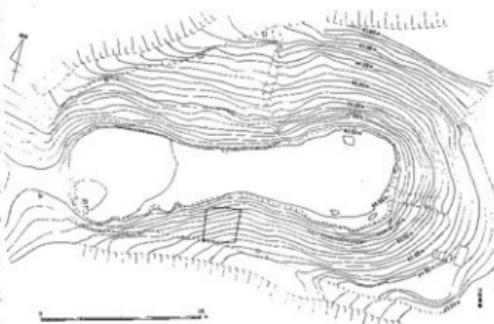
1. 所在地 仲多度郡多度津町大字西白方
2. 調査主体 多度津町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年9月14日
4. 調査面積 13.3ha
5. 調査担当者 町教委 真鍋,文化行政課 國木
6. 調査に至る経過

御産塙山古墳は、昭和57年に県教育委員会が主体となり測量調査を実施した前方後円墳であり、全長約48mをはかると推定されている。また、現在は町史跡に指定されており、積極的保存が図られていた。しかしながら、当古墳の南くびれ部付近において墳丘基底部が掘削されているとの連絡があり、7月24日県教育委員会職員など約10人が現地調査を行った。墳丘は既に貯水槽が設置され、事業者に発掘届の提出を求めるとともに、調査は、掘削部分について断面観察を行い、墳丘を主眼として実施したものである。

7. 調査結果の概要



第1図 遺跡の位置



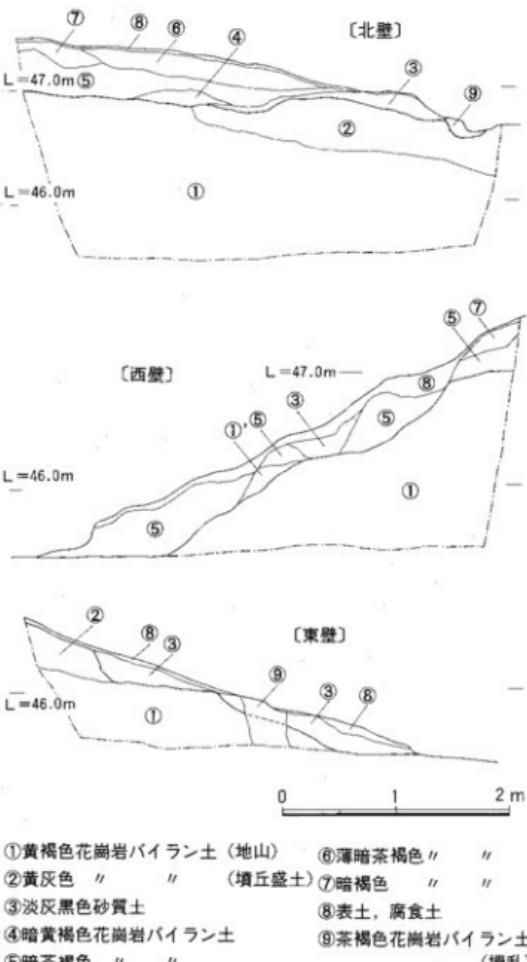
第2図 調査区位置図

人為的大規模な盛土を行った結果と考えられる。昭和10年代に後円部が削平された際の堆土層であるのかもしれない。

東西両壁の上層観察では46.0m～46.3m付近に幅1m～1.2mにわたって平坦面がみられる。いずれも地山整形によるもので、後世の人為的改変とは考え難い。また、東壁では特に平坦に整形した後、墳丘盛土（②層）がみられることからすれば、その平坦面に段築の意味があったものと考えられる。平坦面の幅がやや狭い点は気になるが、前方部は2段築成でL=46.0mであったとみておきたい。後円部については上部がかなり削平されているため、段数については不明とする他ない。

東西両壁ともに、45.4m～45.5mの付近で墳丘傾斜面と平坦な地山面との傾斜変換が明瞭であるので、墳丘基底部と考えられる。現状での墳丘第1段傾斜角度は約30°であり、盛土としてはやや不安定な傾斜角度である。

なお、今回の掘削工事による堆土中より朝顔形等の埴輪片を6点採集している。第4図は朝顔形埴輪の口径部片である。外面下半部は一次調



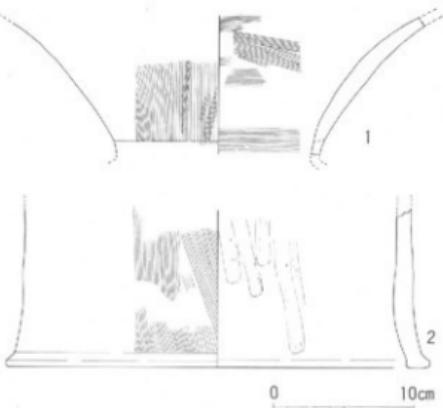
整のタテハケ後、一部で二次調整のタテハケを施し、上半部は、タテハケ後ヨコナデを施す。内面調整はヨコハケ後ヨコナデ。2は底部片で、内面調整ヘラケズリである。

第3図 土層断面図

8. まとめ

短期間の事後調査であったが、墳丘の築成等に関する断片的な知見を得ることが出来た。調査区は古墳のくびれ部やや前方部寄りの地点であり、北壁の東半分（後円部側）で盛土が認められたことからすれば、後円部は地山整形後の盛土、前方部は地山整形によって各々築造されたものと考えられる。確認した墳丘基底部をもとに復元した墳丘推定ラインは、第5図のとおりである。また、採集した埴輪は、調整等からみて川西編年の第Ⅱ期に位置付けられるとと思われ、4世紀末墳に比定しうるものである。

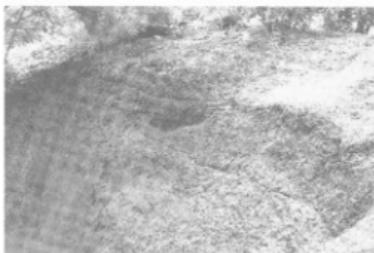
なお、今回の事態について、事業者側は既に陳述の意を表明している。文化財保護意識の普及の必要性が痛感される。（岡本）



第4図 遺物実測図



第5図 墳丘基底部推定線



第6図 北壁土層



第7図 西壁土層

昭和63年度弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地発掘調査概要

1. 所在地 高松市林町1941-1
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月7日～平成元年2月24日
4. 調査面積 365m²
5. 調査担当者 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会
(委員長 木原博幸)
6. 調査の原因 表記関連遺跡の確認調査
7. 調査結果の概要

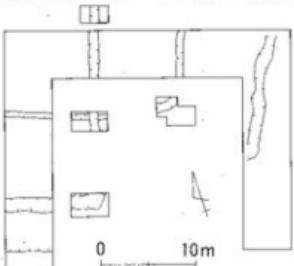
今回の調査では、4層の遺構面について精査を行った。

第1層は、条里と方向を一にした4本の溝が井桁状に検出され、遺構面直上より須恵器杯蓋、須恵質土器碗底部片等が出土している。第2層は自然流路と思われ、流路内より弥生後期と思われる土器片が散出している。第3、4層は水田面である。第3層については遺存状況が悪く詳細は不明であるが、第4層は幅約20cm、高さ3～5cmの畦畔によって2～6m²の水田面に区画されている様子が観察でき、水口も確認できる。水田面に伴う遺物は確認されていない。

8. まとめ

今回の調査区を地形的に見ると、微高地から旧河道への移行部分にあたる。このために周辺部の底地部分における標準的な堆積状況を把握することができた。

遺構については、弘福寺領出図の時期に直結するようなものは確認できなかった。しかし第1遺構面が13世紀代、第4層の水田面が弥生後期以前という推定から、またこの間に挟まれる層が長期的に安定した様相を示し、6世紀末頃の遺物片も散見できることから、当時にも何らか的人的な営為があったことは十分に考えられる。



第1層溝状遺構配置概念図



第4層 不定期小区画水田平面図

栗林公園美術館跡遺跡

1. 所在地 高松市栗林町1丁目20-16
2. 調査主体 栗林公園美術館跡地整備計画調査研究会
3. 調査期間 昭和63年12月20日～平成元年3月31日
4. 調査面積 496.5m²
5. 調査担当者 丹羽佑一（香川大学）
6. 調査の原因 遺跡の整備
7. 調査結果の概要

栗林公園の高松市美術館跡地の東部は、江戸時代の鴨引き堀が築造された地区であった。本調査では鴨引き堀検出を中心に、江戸時代の庭園遺構の全客を知るために、計5本のトレンチを南北或いは東西方向に設けた。結果、東部の堆定鴨引き堀上に設けたトレンチから長さ約22m、幅約2.5mの堀と、中央部の南北トレンチからは南北に走る石樋、西端の南北トレンチから平行する2本の石列を検出した。発掘区の基本層序は香東川の砂礫層がベースで、上に明治以降の盛土がのる。堀と石列は、この盛土によって埋められていた。

8.まとめ

層序、遺構の位置・種類、江戸時代の絵図、栗林公園の沿革から、調査区東部の堀は江戸時代の鴨引き堀、西部の石列は江戸時代庭園の築山間を巡る園路碌石とすることができる。両端に石留めがある点から、園路北端は北池の土手を上ることになる。中央部の石樋は、公園東入口北側の電線地下埋設工事の事前調査において同種のものが検出され、中央部のものと総合すると、美術館跡地の東半分を囲むことから、明治末年のグランドの排水溝とすることができる。（丹羽）



鴨引き堀（東南より）



園路（北より）

仏願古墳群

1. 所在地 坂出市加茂町大字鷺ノ谷1620-10,-6
2. 調査主体 坂出市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年12月22日～昭和63年4月30日
昭和63年7月17日～昭和63年10月8日
4. 調査面積 実測約1,150m²
5. 調査担当 坂出市教育委員会 今井和彦
6. 調査原因 山種建設大規模土地開発（土砂採取）
7. 調査結果の概要

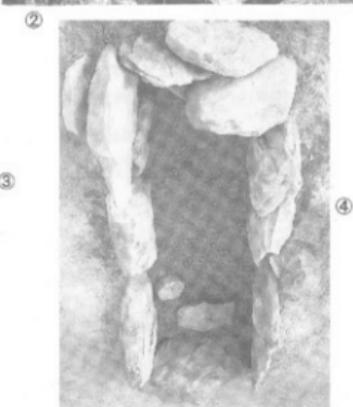
調査は蓬光寺山（東山）より南西に派生する丘陵のうち、鶴ヶ峯より西に形成された鷺ノ谷を中心とした尾根や谷筋が対象地区である。この綾川東の丘陵中腹部には、綾織塚、鷺ノ口古墳群、山ノ神古墳群等の後期古墳群が立地しており、仏願古墳もこの南の一群である。



8. 遺構と遺物

- ①〔松尾神社南尾根古墳〕半圓の竪穴式石室の再調査を実施。長さ2.2m、幅75cm～85cm。遺物は鉄鏃、土器小片。墳丘は消失していた。石室南に隣接して豪棺を検出。
- ②〔方形周溝状遺構〕中央の十坑より弥生後期の遺物が出土。土坑墓と考えられる。
- ③〔松尾神社南尾根石棺〕溝状遺構の溝を切る小型箱式石棺。長さ1m、幅30cm。遺物無し
- ④〔仏願1号古墳〕谷奥の小丘陵を整地して、2次に大別される盛土にて築いた円墳である。墳丘手に周溝を施し、墳丘径は約15m。石室は横穴式石室・両袖。玄門、羨道に仕切石を置き、花崗岩石塊を多用。玄室奥壁幅約2.1m、高さ約2.3m、南側壁長約3.8m、北側壁長約4.0m、玄門部幅約1m。羨道部幅約1m、長さ約1.5m。羨道部幅約1m～1.4m。高さ約1.25m。羨道部幅70cm～1.5m。玄室内に南北方向の棺台石を置き、棺体配置は東西二列並行の可能性がある。今回の調査では、石室内部に高环脚部小片と周溝に須恵器大甕が検出された他は皆無であった。大半の遺物は昭和61年調査で取り上げられており、壺、高环、环蓋身、提瓶、平瓶等の須恵器の他に、鉄鏃や耳環が出土している。時期は6世紀中葉～7世紀初頭である。
- ⑤〔仏願2号古墳〕尾根南傾斜面を整地した円墳で、南側部は直線的形状を呈する。墳丘は東西径約16m、南北径約13m。東側裾部に列石。西、北、東側に周溝を検出。石室は横穴式石室、両袖、安産岩石塊を多用しており、玄室は奥壁幅約1.5m、中央部幅1.7m、玄門幅約1.10m。羨道長2.5～3.0m、羨道幅約2.0mを測る。玄室奥壁部に東西方向の棺台石と東側壁部に南北方向の棺台石を検出。二棺の埋葬が可能であるが、床面直遺物に土器等がなく、不明な点が多い。床面上層にて須恵器壺、土師器等を検出。平安後期～中世頃にかけて再利用されている。（今井）

仏願古墳群の図版 (2 P目)



1. 松尾神社南尾根古墳
2. ハ 壺棺
3. ハ 方形周溝状遺構
4. ハ 小型箱式石棺
5. 仏願2号古墳全景
6. ハ 石室内部
7. 仏願1号古墳



⑧

⑦

讃岐国府跡

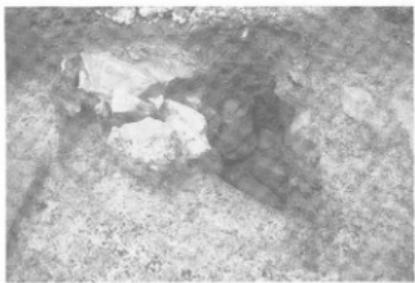
1. 所在地 坂出市府中町5111-3番地
2. 調査主体 坂出市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年10月11日～昭和63年10月20日
4. 調査面積 実掘約45m²
5. 調査担当 坂出市教育委員会 今井和彦
6. 調査原因 住宅新築工事（山本政一氏宅）
7. 調査結果の概要

- (1) 遺構 平安後期～鎌倉時代頃にかけての溝状遺構と石組み井戸や柱穴を検出。溝状遺構は全て残りが悪く非常に浅い。柱穴は径20cm前後のものが多く、大型で方形形状を呈するものは検出されなかった。井戸は大半を後世の掘削で消失していたが、一部に石組みが確認された。
- (2) 遺物 溝状遺構に伴い瓦片（表面格子状叩き目、裏面布目）が数点出土している。井戸は最下層や石組みの間に土師質小皿（大半は回転範切り）土師質椀、須恵器甕片、瓦器片、瓦片等が検出され、須恵器甕等より平安時代後期頃～鎌倉時代頃にかけてのものと思われる。

8. まとめ

調査対象地区は国府に関係する地名としての『垣之内』地区に相当する。西に市道を挟んで鼓丘神社が立地する丘陵があるが、後世に相当削平されており、遺構の残り具合が悪い。地山は黄褐色粘質土で不安定な土質を呈し、東西方向の現水路付近で急激に落ち込む。今回検出した遺構は国府が衰退に向かう平安時代後期頃～鎌倉時代頃にかけてのものであり、奈良時代を中心とした創建期の国府関係の遺構等は検出されなかった。

(今井)



調査区南西隅付近の井戸



調査区南より撮影

讃岐国府跡

1. 所在地 板出市府中町4808-8
2. 調査主体 板出市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月8日～昭和63年11月10日
4. 調査面積 実掘約25m²
5. 調査担当 板出市教育委員会 今井和彦
6. 調査原因 住宅新築工事（綾野秀夫氏宅）
7. 調査結果の概要

- (1) 遺構 南北方向の溝状遺構3本を検出。現市道東端より東5m地点に(SD03) 幅約1m, 深さ20cmの溝と2.4m東に(SD04) 幅約70cm, 深さ20cm溝が検出され、更に東約1mに不整形な溝状遺構(SD02) 幅約40cm, 深さ20cmとこれを切る溝状遺構(SD01) を検出した。このSD01は近代の旧地境に伴う段落ちである。SD03の西側は花崗岩バイラン土を地山とし、遺構は検出されなかった。
- (2) 遺物 溝状遺構からは遺物は検出されなかった。後世の削平が著しく包含層も取り除かれており、地山直上に数点の土師質土器小片が検出されたにとどまった。これらは中世頃のものと考えられるが、詳細な時代は不明。

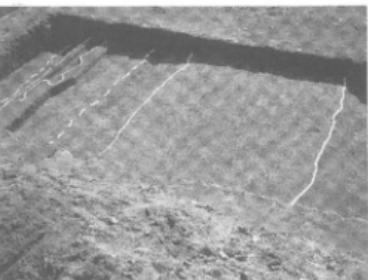
8. まとめ

調査対象地区は国府に関係する地名の『状次』よりやや北方に位置する。西は小丘陵を削平して市道が敷設され、現在の調査区とは2m程の比高差がある。今回の調査では確実に国府に関係する遺物は検出されなかったが、SD03やSD04の方位が、磁北から15°～18°西偏の方向性を示しており、この約17°西偏(N23°W)という方位が開法寺塔跡の中心軸や阿野条理基準線ともほぼ一致する事実は重要視しておく必要がある。

（今井）



調査区市道より東を望む



調査区北方向より撮影 (SD03・SD04)

川津折居古墳

1. 所在地 板出市川津町4808-8
2. 調査主体 板出市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年8月8日～昭和63年8月31日
昭和63年11月11日～昭和63年11月20日
4. 調査面積 実掘約100m²
5. 調査担当 板出市教育委員会 今井和彦
6. 調査原因 市道折居～割古線工事に伴う確認調査
7. 調査結果の概要

- (1) 遺構〔石室〕横穴式石室。奥壁幅1.25m。西壁残存長2.05m。東壁残存長3.20m。高さ1.40m。漢道部消滅のため詳細は不明だが、無袖の可能性がある。〔埴丘〕円墳。細開墾にて埴丘の大半を消失し半分は削平を受ける。断面観察より、埴丘残存高は約50～70cmを測る。周溝等は不明。石室は、花崗岩バイラン土の地山を約奥壁一枚分の深さまで掘り窪めた中に構築。更に数枚の割り石を重ねて天井石を置く構築である。
- (2) 遺物 ガラス玉2点、碧玉製管玉1点、須恵器高杯2点、須恵器杯身1点、須恵器杯蓋1点、土師器壺1点。

8. まとめ

市道折居～割古線工事に伴い新たに発見された古墳である。従来より金山や郷獅山には後期古墳が少なく、金山古墳等が知られるにすぎなかった。金山古墳の遺物が不明なため相互の関係は判然としないが、その規模等は類似している。折居古墳自体は出土遺物より6世紀末～7世紀前葉頃の古墳である。又、現板山町の郷獅山の南丘陵地区に幾つかの後期古墳が知られており、むしろこれらの地区的古墳群として捉えたほうが妥当かと思われるが大東川中流～上流域を基盤とした地域首長クラスの墓の一つと考えておきたい。

(今井)



川津折居古墳石室



石室奥壁左隅出土遺物

稻木遺跡

1. 所在地 善通寺市稻木町下川原
2. 調査主体 稲木遺跡発掘調査団
3. 調査期間 昭和63年8月1日～昭和63年10月27日
4. 調査面積 800m² (調査対象面積1,500m²)
5. 調査担当者 善通寺市教育委員会 笹川龍一
6. 調査の原因 県道西白方善通寺線樋蔽跡切除却工事
7. 調査結果の概要

本調査は昭和61年から昭和62年にかけて実施された県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に統くものである。調査対象区は横断道稲木遺跡B地区から100m程北に位置しているが、いずれも住宅跡地であったことから当初は遺構の発見が懸念されていた。

第1図 遺跡の位置

しかしながら、古墳時代の堅穴住居跡15棟をはじめ奈良時代の溝・掘立柱建物跡等が確認され、更に古墳時代の遺構面下には弥生時代後期末頃の自然河川岸が遺存しており、多数の弥生土器の堆積が確認された。

8. まとめ

稲木遺跡はその周辺の地形等から、金倉川の氾濫原中に形成された大規模な中洲であることがわかる。この中洲上には弥生時代以降の遺構群が残ることが知られているが、今回の調査区では古墳時代初頭から古墳時代後期末頃までの堅穴住居群が確認された。後期末頃の住居内に造り付けられたカマド中に廃絶時に祭祀が行われたことを伺わせる痕跡を残したもの他、屋根等の廃材を住居内で焼却した跡からミニチュア土器が出土した住居もある。市内では住居の廃絶に伴う祭祀は弥生期には確認されているが、古墳期の例は少なく貴重な資料と考えられる。（笹川）



第2図 第3調査区全景（西から）



第3図 カマド中に伏せて供獻された甕の出土状況（第7号堅穴住居跡）

仲村廃寺（旧練兵場遺跡）

1. 所在地 善通寺市仙遊町1丁目
2. 調査主体 善通寺市教育委員会
3. 調査期間 昭和63年11月7日～平成元年2月23日
4. 調査面積 1,400 m²
5. 調査担当者 善通寺市教育委員会 篠川龍一
6. 調査の原因 遺構の確認調査
7. 調査結果の概要

本調査区には仲村廃寺（伝導寺）と呼ばれる白鳳時代に建立された古代寺院跡が残ることが知られており、ここから南側では過去に2度の調査が実施されている。これまでの調査の結果、今回の調査区は



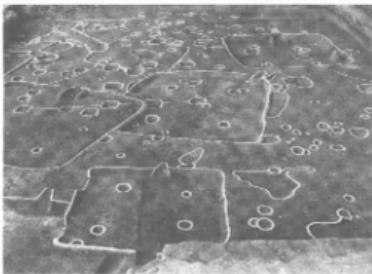
第1図 遺跡の位置

寺域外である可能性が高いが、関連遺構の存在が考えられる上に、当地は旧練兵場遺跡という弥生時代から古墳時代にかけての中核的な集落遺跡でもあることから計3か所に調査区を設定した。結果、仲村廃寺の廃絶期を示すと見られる溝2本と、更に下層からは、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての堅穴住居跡32棟をはじめ、掘立柱建物跡3棟、無数の土坑・柱穴群が検出された。

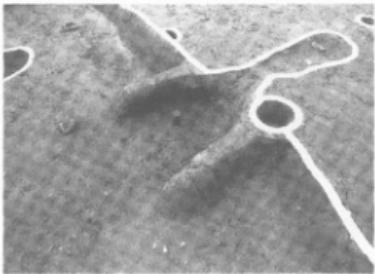
8.まとめ

仲村廃寺の寺域外から寺の遺構とは方位を異にする溝が検出され、中から多量の瓦と共に8世紀頃の須恵器が出土したことから、この寺は非常に短期間で廃絶した可能性が高い。

また、下層から検出された堅穴住居群のうち古墳時代後期のものには立派なカマドが造り付けられたものが多く(14棟)、中から土製鏡模造品が出土したものもある。集落の性格としては稻木遺跡のものとの共通点も多いが、今後整理作業の結果を待って比較研究を行いたい。(篠川)



第2図 第2調査区全景（南から）



第3図 カマドの検出状況（第26号堅穴住居跡）

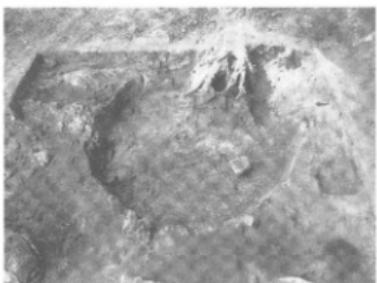
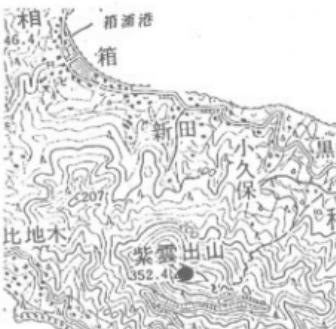
香川県指定史跡 紫雲出山遺跡

1. 所在地 三豊郡詫間町大字大浜乙451番地1
2. 調査主体 詫間町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年7月18日～8月2日
4. 調査面積 500m²
5. 調査担当者 丹羽佑一（香川大学）
6. 調査の原因 紫雲出山遺跡の保存整備事業
7. 調査結果の概要

頂上北部の道に沿って4×3mのグリッドを5か所、その北側に大試掘坑を設けた。各グリッドからは、弥生時代中期後半の弥生土器片と石鐵片等が出土すると共に、柱穴跡や堅穴住居跡を見つけることができた。柱穴から1間1間1辺約2.5mの方形建物2棟を復元できるが、根石をもつ等、高床倉庫跡になると思われる。堅穴住居跡は約3mの円形で北西はしのグリッドからみつけられている。大試掘坑内は現代宅地跡で、遺跡が破壊されているが、下部の弥生時代遺物包含層から中期後半の弥生土器片、サメカイト製の打製石包丁、石鐵等が出土している。

8.まとめ

紫雲出山遺跡では南東部において、昭和30年代前半に3次の発掘調査が行われているが、そこでは多量の弥生時代中期の土器、石器（磨製石斧各種、石鐵、石槍等の打製石器各種）、鉄器と共に石列遺構、貝塚などが発見されている。しかし、柱穴や堅穴住居は今回新たに発見されたもので、本調査地点を含めた北部に、南部とやや異なった弥生人の生活が想定される。紫雲出山ムラの弥生人たちは、北部に住居と倉を建て、南部に貝塚、東部に祭祀場を設けたと考えられる。



堅穴住居址（北より）



高床倉庫址（南より）

香川県指定史跡 小薦島貝塚

1. 所在地 三豊郡仁尾町北丁1322-4
2. 調査主体 財団法人古代学協会四国支部
(下條信行・愛媛大学教授)
3. 調査期間 昭和63年8月4日～昭和63年8月13日
4. 調査面積 66.5m²
5. 調査担当者 丹羽佑一(香川大学)
6. 調査の原因 小薦島貝塚の研究
7. 調査結果の概要

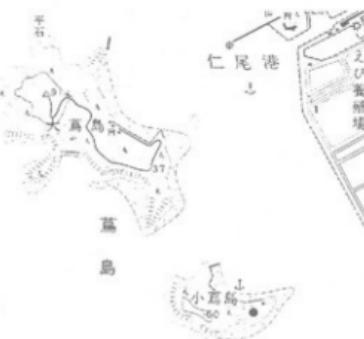
貝塚は島の中央ピークの東側、緩傾斜面から鞍部を経て、平坦になった複数屋根の北縁約100m

の範囲に分布する。発掘調査を、貝塚に西接する鞍部の幅2～1m東西14.5m南北20.5mの十字形トレンチとさらに西方緩傾斜の尾根に直交する幅2m長さ8.5mのトレンチの2か所で行った。縄文遺物として厚さ50cmから100cmの地層から、約300点の土器片と若干のサヌカイト石器片が検出された。出土状態は各トレンチ同様で、第1層表土、第2層古備前焼き、第3・4層無文土器、石器片、第5層縄文時代のベースであった。より貝塚に近いトレンチでは、第4層と5層の間にもう一つ遺物包含層があり山形押型文土器1片と無文土器少量が出土している。

8. まとめ

無文土器は縄文早期中葉の黄島式押型文土器に併行、その後も単独で行われた薦島式に比定される。戦前の調査で、層序に従って上記の変遷が認められたのであるが、本調査はそれを再確認したことになる。また、やや少なくなるが土器片は西方緩傾斜部まで広がり、無文土器の時代に生活が拡大され、その中心も貝塚西部にあったことが推察される。

(丹羽)



十字トレンチ（西より）



土器出土状況（十字トレンチ西部）

宮山窯跡

1. 所在地 豊中町大字比地大3280-6
2. 調査主体 豊中町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年7月27日～昭和63年9月6日
4. 調査面積 295m²
5. 調査担当者 豊中町教育委員会 森 裕行
6. 調査の原因 遺跡周辺の分布状態調査
7. 調査結果の概要

(1) 遺構 今回の分布調査で遺構は確認されなかった。

(2) 遺物 出土遺物は須恵器片だけで他の遺物は今回の調査では検出できなかった。種類は甕の破片を主として高杯、壺、器台、窯道具、窯壁などであった。高杯について断定できるのは数点ではあったが、初期のものとわかるものが1点であった。出土須恵器のうち3点などが7～8世紀のものだと思われるものがあった。1点は窯壁塊と一体となっていた。

8. まとめ

今回の分布調査の範囲のなかには工房等の生活活動遺構は含まれておらず。もう少し北西部の現在はみかん畑となっているところか、北東部において検出されるかもわからないが、南東部であれば、現在は掘り込まれて整地されているために可能性は少ないと思う。窯跡は3280-6番地より大きくなれば他にも検出されるかもしれないがすぐ近辺にはないようと思われる。3280-6番地に主体部が1～2基あるのではと考えられる。

(森)



3280-6番地 窯跡主体部推定地



3280-6番地のすぐ下方の公道にトレーンチを設定し、掘り込んだところ

妙音寺遺跡

1. 所在地 豊中町大字上高野1988
2. 調査主体 豊中町教育委員会
3. 調査期間 昭和63年12月12日～昭和63年12月27日
4. 調査面積 90m²
5. 調査担当者 豊中町教育委員会 森 裕行
6. 調査の原因 客殿建て替え
7. 調査結果の概要
 - (1) 遺構 近世に建てられた本堂の雨落ち溝が検出されたのと、近世に作られ、昭和になって埋められた掘跡の検出がある。
 - (2) 遺物 現代の瓦にまじって古代の瓦片が20数点検出された。
8. まとめ

近世に作られた掘によって擾乱されているので特徴的なものの検出がないために調査部分についてはあまり分からぬ。ただ本堂が旧寺院の建造物の跡に建立されていれば、すぐ北側になるために遺構の検出がなされなくてもふしぎではないと思う。
（森）



調査前に客殿を取りこわしたところ



調査後の状況

(1) 四国横断自動車道(高松—善通寺)建設に伴う発掘調査概況

1. 概況

調査の経過 昭和63年度調査は、丸亀市郡家地区・同市川西地区・同市飯野地区・飯山町地区・綾南町地区の計94,437m²を調査対象として、同年3月に試掘調査を実施した郡家地区から着手した。

郡家地区では、試掘調査の結果、直営調査対象とした三条番ノ原遺跡・郡家原遺跡・同一里屋遺跡の調査を4月18日から開始した。また、今年度から本格的に導入した工事請負調査対象の三条黒島遺跡・郡家大林上遺跡・同田代遺跡については、工事設計書（4月当初から上木部横断道対策室の協力を得た）の作成及び入札事務に期間を要し、6月15日に着手した。

飯野地区については、用地買収との関係もあり、A遺跡の試掘を9月に実施した。試掘調査の結果、A遺跡は埋蔵文化財包蔵地とは認められず、この時点で次年度調査予定地区であったB遺跡（東二瓦礫遺跡）を今年度調査対象に振り替えた。

11月には、飯野B遺跡・次年度調査予定であった川西地区で試掘調査が実施され、飯野B遺跡が3,366m²、川西A～D遺跡で計24,035m²が確定面積となった。

この結果、今年度の調査面積の拡充を目的に、飯山・綾南地区を次年度対象に振り替え、川西A・B・C遺跡を今年度調査対象遺跡とした。こうした経緯をふまえ、本年度事業面積は最終的に89,993m²に変更した。

調査の概要 各遺跡の調査の概要は次に譲るとして総括的に概観しておく。

丸亀平野は沖積層で形成されているものと從来考えられていたが、三条黒島遺跡において旧石器時代に属する剣片類が原位置を留めた形で検出されたことにより、丸亀平野の形成史を見直す必要が出てきた。また、同様に郡家田代遺跡でもナイフ形石器がまとまって検出され、郡家一里屋遺跡では縄文時代草創期に属する有舌尖頭器が出土している。

次に弥生時代に位置付けられる遺構が三条番ノ原遺跡・二条黒島遺跡・郡家原遺跡・郡家田代遺跡で確認され、このうち郡家原遺跡では後期後半の堅穴住居跡を含む集落跡を検出している。

奈良時代から平安時代には、郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡で集落跡が確認され、齊串・墨書き土器・縄鞆等の遺物が出土している。また、郡家大林上遺跡の自然河川からも齊串等の木製品が出土しており、那珂郡郡衙推定地の周辺部を思わせる成果が得られた。

調査目的の一つに上げている「条里」関連遺構については、特に溝状遺構の検出が多く見られた。郡家番ノ原遺跡・郡家原遺跡では特に平安時代前半に埋没したことが明らかな溝状遺構が検出されており、条里区画の推定等今後の研究に大きく寄与できるものと考えている。

中近世に属するものとして、多くの遺跡で建物跡を含む遺構を検出することができた。なかでも、飯野東二瓦礫遺跡では溝に囲まれた屋敷跡と思われる遺構が検出されており、この時期の屋敷の研究に良好な材料を提供した。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要

No	遺跡名 (旧遺跡名)	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	遺物
1	三条番／原遺跡 (郡家A遺跡)	丸亀市三条町 中村	12,041	63. 4.18～ 元年. 2.10	弥生時代 古代	堅穴住居・自然河 川・溝状遺構	弥生土器ほか
2	三条黒島遺跡 (郡家B遺跡)	丸亀市三条町 黒島	7,877	63. 6.15～ 63.11.26	旧石器時代 弥生時代 近世	ニコット・溝状遺 構・建物跡	旧石器・弥生土器・ 陶磁器
3	郡家原遺跡 (郡家C遺跡)	丸亀市三条町 黒島・郡家町原	17,099	63. 4.18～ 元年. 3.31	弥生時代 古代	堅穴住居・掘立柱 建物・溝状遺構	弥生土器・級粒土 器・漆串ほか
4	郡家一里塚跡 (郡家D遺跡)	丸亀市郡家町 八幡上	14,067	63. 4.18～ 元年. 3.31	古代	掘立柱建物・溝状 遺構	有舌尖頭器・縫納 土器・灰釉土器ほか
5	郡家大林上遺跡 (郡家E遺跡)	丸亀市郡家町 大林上	11,175	63. 6.15～ 元年. 3.22	古代 中近世	掘立柱建物・溝状 遺構・自然河川	須恵器・齊串ほか
6	郡家田代遺跡 (郡家F遺跡)	丸亀市郡家町 田代	12,741	63. 6.15～ 元年. 2.17	旧石器時代 弥生時代 古代 近世	掘立柱建物・溝状 遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥 生土器・須恵器・ 近世陶磁器
7	川西北・原遺跡 (川西A遺跡)	丸亀市川西町北 原	3,033	63.12.12～ 元年. 3.25	中近世	掘立柱建物・溝状 遺構	
8	川西北・七条1道 跡(川西B遺跡)	丸亀市川西町北 七条	4,034	63.12.13～ 元年. 3.27	古代 中近世	溝状遺構・自然河 川	土器器・須恵器
9	川西北・七条1道 跡(川西C遺跡)	丸亀市川西町北 七条	4,760	元年. 2.2～ 元年. 3.31	中近世	掘立柱建物・溝状 遺構	土器器
10	飯野・東二瓦砾道 跡(飯野B遺跡)	丸亀市飯野町 東二瓦砾	3,336	63.12.13～ 元年. 3.27	古代 中世	掘立柱建物・溝状 遺構・自然河川	土器器・須恵器
計			89,993				

(2) 国道バイパス建設に伴う発掘調査概況

1. 概況

今年度の調査は、香川県教育委員会との間に昭和63年4月1日付および昭和63年6月30日付でそれぞれ締結した「埋蔵文化財調査委託契約書」および「埋蔵文化財調査委託契約書の一部を変更する契約書」にもとづいて、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

上天神遺跡の調査は、昨年度に引き続きおこなった。昨年度の調査で弥生時代後期の堅穴式住居跡を中心とする遺構群を検出していたが、今年度の調査でその近接地に同時代の溝状遺構・土坑・ピットなどを検出した。そのうちの一條の溝状遺構から、椎に使用されたと思われる杭列を検出した。林・坊城遺跡の調査で、縄文時代晚期から中世後半にいたる遺構群を検出した。そのうち、調査区のはぼ中央部で縄文時代晚期の自然河川を検出しているが、突唇文土器を中心とする土器群とともに、諸手鍬（狭鑿）などの木製農耕具が出土している。六条・上所遺跡の調査で、弥生時代から古墳時代にかけての溝状遺構・土坑・ピットなどを検出した。しかし、六条・上所遺跡および近接する林・坊城遺跡はいずれも後世の開墾などによって遺構上面を削平されていると思われ、遺構・遺物の遺存状態は良好ではなかった。東山崎・水田遺跡の調査で、中世前半から近世にかけての遺構群を検出した。なかでも掘立柱建物跡群を回繞する形で溝状遺構を検出しておらず、濠によって取り囲まれた近世の屋敷跡の可能性がある。前田東・中村遺跡の調査で、縄文時代晚期から中世にかけての遺構群を検出した。そのうち、古墳時代前期の自然河川から弓・手斧の柄・鎌の柄などの木器を、また奈良時代から平安時代にかけての自然河川から人形・畜串などを検出している。香川郡条里遺跡の調査は、高松平野に見られる方格地割りと条里制の関係を究明することを目的の一つとして着手したが、当該地がすでに旧香東川の氾濫などにより旧状をとどめていなかったため充分には確認できなかった。京免遺跡の調査で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を検出した。当該地周辺では、旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が確認されていたが、今回の調査によっても金倉川西岸の緩斜状地上に弥生時代と中・近世の遺跡の新たな広がりを確認した。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物	
上天神遺跡	高松市上天神町 同 太田下町 同 三条町	12,600m ²	昭和63年6月10日 ～同年11月30日	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 ピット 自然河川	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	石器 石包丁 石鎌 木器 枕
林・ 坊城遺跡	同 林町	29,200m ²	昭和63年4月14日 ～同年11月30日	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 ピット 自然河川	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	石器 石鎌 石包丁 石斧 石錐 石匙 木器 漆 振り具
六条・ 上所遺跡	同 六条町	30,310m ²	昭和63年8月6日 ～平成元年 8月31日	掘立柱建物跡 棚列 溝状遺構 土坑 ピット 自然河川 井戸跡	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 瓦質土器	石器 石鎌 石匙 石製品 管長 土鍬
東山崎・ 水田遺跡	同 東山崎町	25,400m ²	昭和63年10月1日 ～平成元年 3月31日	掘立柱建物跡 溝状遺構 井戸跡 土坑 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器	石器 尖頭器 木器 兜符木輪 漆塗碗
前田東・ 中村遺跡	同 前田東町	16,170m ²	昭和63年8月16日 ～平成元年 3月31日	溝状遺構 土坑 ピット 自然河川	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 瓦質土器 輸入青磁 輸入白磁 瓦	石器 石鎌 石斧 石包丁 木器 斧の柄 鏡の柄 弓 木製模造品 柵串 人形
香川郡 条里遺跡	高松市田村町	4,000m ²	昭和63年7月5日 ～同年7月9日	溝状遺構 ピット 自然河川	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 瓦器	
京免遺跡	普通寺市左北町	9,800m ²	昭和63年7月1日 ～同年8月31日	溝状遺構 土坑 ピット	弥生土器 土師器 陶磁器 輸入磁器	石器 石鎌 石斧

1. 國分台遺跡
2. 糸の部山古墳
3. 鳴部南谷遺跡
4. 国道試験
5. 福家東羽間地区
6. 下屋遺跡
7. 伊喜末遺跡
8. 西又遺跡
9. 僥中地遺跡
10. 千町、了智坊遺跡
11. 猿ノ又、神之壇遺跡
12. 国庁塚
13. 元船木遺跡
14. 戸形遺跡
15. 城山古墳群
16. 御座聖山古墳
17. 弘福寺聖蹟園山田
耕田団比定地
18. 梨林公園
19. 仏原古墳群
20. 鶴城國研跡
21. 鶴城國研跡
22. 折居古墳
23. 稲木遺跡
24. 仲村柴寺
25. 紫雲出山遺跡
26. 小島貝塚
27. 宮山窯跡
28. 妙音寺遺跡



香川県埋蔵文化財調査年報
昭和63年度

平成元年3月31日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市番町4丁目1番10号

電話(0878) 31-1111

発行 香川県埋蔵文化財研究所

印刷 緯美巧社